

世界之十大宗教序

序

題して「世界之十大宗教」と云ふ。其の名大なりと雖、此の冊子は誠に小なり。こゝを以て、或は羊頭狗肉の類にあらすやと云ふものあらん。著者は先之を恐る。然れども、羊頭を掲げて狗肉を賣るは詐欺なり。此の冊子小なりと雖、著者は決して其の狗肉ならざるを知る蓋し。誠に世界に存したる十箇の大宗教を約説して、之か比較を試みたるものなればなり。其の名の大なるは、其の實の爾かく大なるに由り、冊子の小なるは、唯約説を主としたるに由る。

文

(一)

學術の精微細密の理論説明を要するものなることは、余之を知る。約説畧叙の、以て之を盡しかたきも、亦余之を知る。然れども、細密なる問題に入るの前に、その大體に通づるは、學理研究の順序なり。比較宗教學に於ても、亦然りとす。比較宗教學の大體に通じ、而る後、其



の細密の問題に及ぶ、是其の研究の順序なり。此の書の畧叙に止まりたるは、即ち此の大體を説かんか爲なればなり。宗教を排するの聲は、近時殊に之を諸方に聞く。然れども、之を排するもの、中、未だ宗教の何たるやをも知らざるか如きものあるに似たり。その實体を知らずして之を排し、之を攻む、輕佻陋見、驚くべきなり。苟も宗教に就て云々せんとするものは、世界の宗教の大體に通せざるべからず。此の著小なりと雖、以て聊か世界の宗教の如何なるやを窺ふに足らんか。即ち此の輩の一助たらずと云ふことなかるべし。

抑も宗教の起るは、起るの意味あり、其の變遷も、亦各意味なくはあるべからず。國家の盛衰消長と關係し、個人の特質思想と連關す。羅馬に入れる基督教は如何に變遷したりしか、スカンデナビヤ人種

の特質は、如何に基督教を改革せしむる原動力となりしか、佛教の波羅門教の族制に反して起りたる、基督新教の舊教の法治壓制に反して起りたる等、宗教の起伏變遷、並に同化の迹を見來れば、正に人生の大事の其の間に存したりしを知るに足れり。之と同時に、新に一宗教の或る國家に入るに當りて、其の國民の特質と如何に同化するものなるかの理も、亦之を歸納するよとを得んとす。余の此の著をなす、唯單に世界の宗教の閑略なる比較のみにあらずして、又別に主張する所あり。即ち宗教の變遷同化の理を明にせんよとを期したるもの是なり。素より約説を主としたれば、所思の十分の一をも盡さずと雖、亦以て這般の事に着眼するもの、參考たらんか。即ち此の著たる、比較宗教學の緒論たり、宗教の變遷同化の理の概説たらんとするにあり。若し夫れ、讀者にして此の二つの問題を

理解するに就て、此の書の價值を知るあらば、著者の望乃ち足る。

明治三十年十月

著 者 誌

# 世界之十大宗教

## 目 録

第一章 緒論.....一

(一)比較宗教學 (二)比較宗教學の價值、并に位置 (三)本書の目的

第二章 宗教の定義并に起源.....五

(一)宗教とは何なりや (二)カントの定義 (三)フロアの定義 (四)宇宙の最大力の儀  
拜 (五)シエラエル、エム、ヘン、及ハーゲルの定義 (六)コント、及フリーエンハッロの  
定義 (七)マックス、ミュラーの定義 (八)定義を附するの困難 (九)宗教の起源 (十)拜  
物教 (十一)動物崇拜教 (十二)拜鬼教、及祖先教 (十三)偶像教、及多神教 (十四)一神教  
(十五)宇宙の不可思議力 (十六)適當の定義

第三章 埃及、希臘、羅馬、及スカンヂナビヤの古教.....三三

(一)最古の國最古の宗教 (二)バビロンの宗教 (三)埃及の人種 (四)埃及の古教  
(五)三種の神 (六)「オリシニス」の神傳 (七)希臘の古教 (八)希臘の神 (九)詩人の神  
(十)美術家の神 (十一)哲學者の神 (十二)羅馬の古教 (十三)羅馬古教の神 (十四)

羅馬古教の衰廢(十五)スカンデナビヤの人種(十六)スカンデナビヤ宗教の精神(十七)其の經典并に神(十八)其の勢力

第四章 猶太教.....四五

(一)猶太の土地及人種(二)マソラフの神(三)モーゼの教(四)メデチ及ソロモ(五)其の現勢

第五章 「イスラーム」教.....五三

(一)アラビヤ人種(二)モハメット(三)モハメットの性行(四)其の教理(五)他の宗教との比較

第六章 基督教.....六五

(一)基督教の創立者(二)イエスキリスト(三)基督教の教理(四)基督教の神(五)三位一体(六)基督教の聖運發達(七)基督教の宗派

第七章 ヘルシヤ火教.....七八

(一)ゼンド・アヘメスターの知識(二)ゾラスターの時代(三)ゾラスター教の精神(四)ヘルシヤ火教の神(五)其の現勢(六)波羅門教との關係

第八章 波羅門教.....八七

(一)印度人種(二)波羅門教の經典(三)波羅門教の神(四)印度哲學の三派(五)波羅門教の現勢

第九章 佛教.....九七

(一)東洋の新教(二)釋迦牟尼(三)佛教の經典(四)佛教の中央思想(五)其の現勢(六)其の宗派

第十章 結論.....一〇〇

(一)「アリアン」の宗教「キナック」の宗教(二)神道と祖先教(三)儒教(四)道教(五)世界的宗教

目錄畢

# 世界之十大宗教

久津見息忠著

## 第一章 緒論

### 比較宗教學

世界何れの國に行くも、その人民は、皆各々宗教を有せざるはなし。信仰、經典、儀式等は、各々異なる所あり。雖然れども、一種學問にわらず、政治にわらずして、その人民の所依所信たるもの存せざるはなきなり。其の所依所信たるもの、即ち宗教なり。故に人間を宗教とは離るべからざる關係を有したるものなりと斷定することを得べし。

此の人間を離るべからざる關係を有する宗教は、世界各國固より一にわらず、其の教理、信條、儀式各々相異なるれども、その相異なる間、亦相一致する所あり。此等一切の宗教を網羅して之を比較し、其の相異なる所以、一致する所以を論究するは、即ち比較宗教學の業なり。抑も比較研究は近時學問界の大勢にして、誠に學術の爲に利

(一)

益少なからざるものなり。宗教を研究する上に於ても、亦極めて有用にして缺きがたきものなり。即ち之を詳言すれば、各人種、各國民の宗教の起源、發達、教理、信條等を比較し、其の差異し、一致する所以を檢證して哲學上、社會上の價值を定め、又その間に存する一貫普通の大道理を發見し、以て宗教統一の道を開く的前提たるにあり。

近時或る一流の論者は、宗教を斥けて至愚の害物なりとなすものあり。宗教果して悉く然るものなりや否や、余は頗ぶる疑ひなきを得ず。若し全く一切宗教を排し去らんと欲せば、必ずや一切の宗教を研究し、その理非利害を知悉したる後ならざるべからず。之を研究知悉せんとするもの、亦比較宗教學に依るを善しとす。之に依らずして、妄に宗教を排せんとするものあらば、その愚は寧ろ笑ふべきなり。

比較宗教學は世界各種の宗教を比較論評するにあり。或る一の宗教又は宗派の辨護者たるべきものにあらず。別言すれば、世界の宗教の批評なり、論究なり。故にその各宗教の眞實の教理、信條、儀式等を稽査せざるべからず。その事實に依りて批評論究すべくして、決して空想を以てすべからず。既に事實に依るべくして空想を以てすべからず。故に各宗教を表出したる所の各人種、各國民の言語、文字を通せざるべからず。然る

に亡びたる國民の言語、文字は既に死したるものなり。活ける現今の各國語を學ぶすら、既に困難ならざるにあらず。況んやこの死したる國語を學ぶをや、之を學ぶ困難たり。従てその宗教を研究するも亦困難なり。比較宗教學の困難なる事業にして、今尙幼稚なるを免れざる一の原因はこゝにありとす。

(二) 比較宗教學の價值并に位置

比較宗教學は困難なる事業にして、尙幼稚なるを免れず。雖、今世紀に於ては、既に比較解剖學、比較心理學、比較博言學、比較地理學等、一科の學中に於て、又一の専門學を生じたれば、宗教學の中、又比較宗教學なる一の専門學なきを得ざるなり。現に獨、英、佛、の諸國に於て、此學に關したる専門家少なからず。マクス、ミュラー、バンセン、ドリンケル、ハードウイキ、ダンゲル、バルノツフ、ルナン、クラウザー、マーリス、クックス等の如きこれなり。

比較宗教學は幼稚なりとは雖、既に發達の望充分なるものあり。波羅門教の如き、ヘルシヤ教の如き、中央亞細亞の宗教に關したる智識は、三十餘年前までは、未だ之を充分に得ることを得ざりしかども、今日にては之を明にするに至れり。埃及、羅馬、スカンヂ

ナビヤ等の古教につきても、亦然るものあればなり。  
 宗教を以て、人間靈魂の最高度なる不可思議力に因するものなりと見るときは、即ち比較宗教學は、この人間靈魂の不可思議力に關したる歴史の研究なり。又宗教を以て人間道徳の最大原理に重大の關係あるものなりと見るときは、即ち比較宗教學は、人間道徳の最大原理に關したる事實の研究なり。共に誠に吾人に必要歎くべからざるものならずや。

(三)本書の目的

比較宗教學は斯の如く吾人に緊要なり、重大なり、然れども、困難なる業なれば、之を容易に講説することを得べきものにあらず、本書の如きは、この比較宗教學に關したる一小論文のみ、世界の著るき宗教の如何なるものなるやを概説したるもの、み之を比較宗教學と稱するは、僭越なりと雖、然れども、亦少なくとも、この世界の最大なる宗教に關しては、漏れなくその大體を説かんことを期す、亦以て宗教學上の知識を益するに足らんか。

抑も宗教に人種的なるものあり、世界的なるものあり、人種的の宗教とは、その信仰或

る人種にのみ限られたるものを云ひ、世界的とは如何なる人種にも普及せらるべき性質あるものを云ふ。而して、その人種的なる宗教の中にも、その全人種に及ばずして、或る一小地方にのみ限られたるものあり、之を地方的宗教と云ふ。この地方的宗教も、その信者の數を増し、範圍を廣くするに至れば、人種的の宗教となるものなり。然れども、地方的たるに止まる間は、微少にして、又吾人の注意を要することなし。本書の説く所のものは、この地方的宗教に及ばずして、唯大なる人種の宗教、并に世界的の宗教なり。是蓋し最も吾人の注意を要すべきものなるを以てなり。然らば、その宗教は抑も何々ぞ、曰く、埃及、希臘、羅馬、スカンデナビヤの古教、曰く、猶太教、曰く、イスラーム教、曰く、基督教、曰く、ヘルシヤ教、曰く、波羅門教、曰く、佛教、これなり。

第二章 宗教の定義并に起源

(一)宗教とは何ぞや

凡そ學を講せんとするに當りて、第一に要する所のものは、其の學の何たるやを明にするにあり。論理學の如き、文法學の如き、その他種々の科學の如き、開卷第一に提出せ

らるゝ所のものは何ぞやと願みよ、論理とは何ぞや、文法とは何ぞや、と先その定義と問ふものならざるはなし、然らば則ち、宗教學に於ては、先第一に宗教とは何ぞやとの疑問を提出して、以てその定義を明にせざるべからず。  
然れども、宗教とは何ぞやとの疑問は、頗る高遠なるものにして、各宗教學者の所説を異にす、抑も定義は之を下したる物に對して、一様に適用せられ得るものならざるべからず、甲の宗教の定義としては適當なれども、乙の宗教の定義としては不適當なるが如きは、決して正當なる定義と云ふべからず。

(二)カントの定義

有名なる哲學者カントが下したる宗教の定義は、宗教は道德なりと云ふにあり、抑もカントは吾人々類か責任義務の意識ある所以のものは、これ神の命令して然らしむるものなりとなしたれば、其神の信仰を教ふる宗教は、即ち道德なりとするに至れるなり、國立宗教、又は教會に於ては、素より其の信徒をして道德的ならしめざるべからざるや論なし、されば善良なる道德を保持するに足るべき宗教を造らんとは、吾人の

希望する所ならざるべからずと雖、これ宗教に對する吾人の希望にして、定義にはあらず、宗教とは何ぞやとの疑問に對したる解釋にあらざるなり。

(三)ヒューテの定義

哲學上にありては、カントの娘なりと云はれたるヒューテは、宗教に關しては全く反對の説を立てたり、其の説に據れば、宗教は吾人の實生活に勢力あるものにあらざるを以て、道德行為の動機たらしめんとせば、反て是社會を害するに至らん、蓋し宗教は宇宙万有の根源調和に於ける、最高の問題につき、吾人を満足せしむる知識、即ち知見なればなりとせよ、然れども、その説も亦宗教とは何ぞやと云へる問題に答へ得て明瞭なるものにあらざる、カントと同じく唯宗教は知識ならざるべからず、吾人の最高の知見と與ふるものならざるべからずと云へり、希望を言明せるものに過ぎず、何となれば、總ての宗教はこの定義を以て解釋することを得ず、吾人に最高の智見を與へざる宗教もあればなり。

(四)宇宙の最大力の崇拜

多くの宗敎學者は、宗教を以て宇宙の最大力の崇拜に依りて成るものなりと説けり。

と云ふは、宗教の定義に對して、先第一に宗教とは何ぞやとの疑問を提出して、以てその定義を明にせざるべからず、然れども、宗教とは何ぞやとの疑問は、頗る高遠なるものにして、各宗教學者の所説を異にす、抑も定義は之を下したる物に對して、一様に適用せられ得るものならざるべからず、甲の宗教の定義としては適當なれども、乙の宗教の定義としては不適當なるが如きは、決して正當なる定義と云ふべからず。



是多くの宗教に於て、崇拜をその緊要條件とするを以て下せる所の定義なるべし。ノスイスの如き、崇拜と云へる條件なくして宗教の存すべからざるを説けり。然れども、世界の人民の中には、宇宙の最大力あることを信せざるにあらざるも、未だ曾て之を崇拜せざるものあり、又崇拜する所のものあるも、宗教を有せざるものあり。西オーストラリアのニューエルンシャの人民の如き、モトゴンと名付けたる宇宙創造の神ある事を信すと雖、然れども、之を崇拜することを敢てせず。又米國ミズッリー州の印度人の如き、靈魂不死を信じ、大靈魂の存在するを信するのみならず、人の手にて成らざるものは、皆之を靈ある物なりとして崇拜すと雖、別に宗教と云ふべきものなし。斯の如く宇宙の最大力あるを信するも、崇拜する所なく、崇拜する所あるも、宗教と云ふべきものなし。こは是野蠻の一種族の事にして、一地方に限れるものなれば、宗教の必ずしも崇拜と云へる條件を伴ふものにあらざることを證するに足らずとせば、更に歐洲近世の宗教、並に宗教論に徴せん。基督教の一なる、クエーカー宗の如き、一切形式的の崇拜をなさざりしなり。又カントの如き、道德を伴はざる信條、即ち形式的崇拜を以て神を崇めんとするは、宗教にあらざりして迷信なりと云へり。故にこの定義

も亦適當なるものと云ふべからず。

(五) シュラエルマーヘル、及ヘーゲルの定義

シュラエルマーヘルは、宗教は人か測知すべからざる或る物(即ち神)の絶對的從屬物なりと意識するに依りて成るものなりとしたり。之に反して、ヘーゲルは宗教は完全自由のものなりとしたり。前者の意見にては、天地万物は皆その創造者なる神の隸屬物なり。この隸屬物なることを意識するもの、即ち宗教なりとし、後者の意見にては、神の精神(無限)が人の精神(有限)を経て自から意識せらるゝに至れるもの、即ち宗教なりとしたるを以て、斯の如き定義を下せしなり。この二説は全く相反したるか如し。雖、歸する所は、天地萬物の根源たる唯一の神が、人の精神に依りて理解せられ、而して、人の前に實現するに至れるもの、これ宗教なりとするものなれば、要するに、宗教は人の精神に依りて成れるもの、人に依りて成れるものなりとするにあり。

(六) コント、及フリーエルバッヒの定義

此の點よりして、又一種の説を立てたるものあり、これ佛に於ては、コント、獨に於てはフリーエルバッヒなり。即ち宗教は人の造れるものにして、人を目的とするものなり。抑も

人は人以上の至高の存在物につきて知識あると能はず。故に宗教は常に個人としての人のみならず、人種としての人を以て、宗教的知識并に崇拜の目的物となすものなり。即ち人道と云へる概念は神として崇拜せらるゝとなすものこれなり。然れども、是等の定義は宗教の何ものなるやを説明し盡したりとは、云ひがたきものありとす。蓋しシラエル、マーヘル、ヘーゲルの定義の如きは、唯一神教の定義としては適すべきも、無神の宗教の定義には適しかたきものあり。又コント、フーエル、バビの定義の如きは、頗る漠然に失したり。何となれば人道と云へる概念と神と云へる概念とは、固より同一にあらざる。然るに之を同一に見るのみならず、人を目的とする所のものは、常に宗教のみならず、政治法律、倫理、経済等、皆然らざるはなければなり。

(七) マクス、ミュラーの定義

マクス、ミュラーは、別に一種の定義を下して云ふ、宗教とは人かその感覺、又は理性を離れて、以て種々の名目の下に、無限物を理解せんとする所の心意の能力、即ち性癖なり。この性癖なくしては宗教は成立せずと、然れども、メンズイスは之を駁して、此の定義に據れば、宗教は人類が人類以上の存在物(即ち無限物)にして、その智力を以てして

は理解すべからざるものを、信仰を以て理解せんとするものとなる。是唯最上完全物を信仰するに至る道程の説明に止まりて、之を崇拜する所以に至りては、未だ全く説明せられず。要するに、人の智力の不完全を以て宗教の因て生じたる所となすに過ぎず。されば、宗教は實行のものにあらざりて、智力的のもの、崇拜のものにあらざりて、理解のものとなるべしと云へり。蓋し此の定義の足らざる所を指摘し得たりと云ふべし。

(八) 定義を附するの困難

斯の如く諸宗教學者の説異なる所以のものは、世界各國の宗教、各々異なりて以て之を一律の下に規しがたし、人各々その信仰を異にするが如く、宗教の思想を異にするを以て、之に定義を下すは困難なるものあればなり。然れども、宗教には宗教たる所以の特性なからざるを得ず。その特性は各宗教その教理、信條、儀式等を異にするの間に於て必ずや各自一致する所なからざるを得ず。この一致する所の特性を捕へて、之を概括したらんには、即ち完全ならざるまでも、適當を失せざる定義を造ることを得べし。故に宗教の定義を造らんとすれば、宗教の宗教

たる所以の特性を観察することを要す。

(九) 宗教の起源

然れども之を観察せんとすれば、宗教の起源に遡りて、その何等のものに原因するものなるかを究めざるを得ず。蓋し各宗教は皆各々その歴史を有して、歴史的發達をなしたるものなれば、その實體を知らんとすれば、之をその原因よりして歴史的に見ざるべからざればなり。

宗教の起源を究めんとすれば、宗教の初てこの世界に現はれたる時のいつなるべきかを究むることを要す。マクス・ミュラーの説く所に據れば、宗教はこの世界は古きものにはあらざるべきも、少なくとも、人類が世界を知り初めたる時は古きものなり。と云へり。又ヘルダーの説に據れば、文字なると言語なるとを問はず、我地球に至る所、宗教的傳説の萌芽を有せざるはなしとせり。抑も「アリヤン」人種が未だ南方印度に下らず、地方歐洲に移らざる前、即ち韋陀の最古の讚美歌、又は「ホーメル」の詩篇なども未だ世に現はれざる數千年前に於て、既にこの人種の間、宗教の萌芽ありし事は、「アリヤン」原語の研究に依りて之を推知するに足れり。Dionysiusなる「アリヤン」語は、その元形

容詞にして光明の意なりしが、暗黒に反するの故を以て光明力と云ふ義に用ゐられ。遂に神と云ふ意に變せり。この語羅典の Deo に同じ。然らば即ち「アリヤン」人種は既に早くより神と云へる思想を有したりしものにして、宗教の萌芽ありたるものと云ふべし。

既に斯の如く、宗教は、最も古くよりありしものなりとすれば、宗教は吾人の發明せる者にあらずして、遺傳したるものなりと云はざるべからず。然れども、その古くよりしるてある所の宗教の如何なるものなりしかを研究するの業は、頗る困難ならざるを得ず。埃及の如く、事物を保存するの慣習古くより存し、神の像あり、木乃伊あり、「パピルス」古代埃及に於て事物を記録したるものあり、加ふるにその他に歴史記録の徴すべきものある國に於ては、此の種の研究も、左して困難あるにあらずと雖、然れども、印度の如く、時間空間の思想乏しく、時代場所の記録を缺く地方にありては、今に於てこの種の研究をなす極て困難なり。故に宗教の起源に關しては、已むとを得ず。推測を下さざるを得ず。フーエルバヒは宗教の原因を論じ、人間に遺傳せる固有の病癖に因す、人間の病的心意は一切の宗教、一切の悲嘆の原因なりと云へり。然れども、この説たる

既に紀元前六百年の古に於て、ヘラクリトスの唱へし所に拘はる。曰く、宗教は神聖なる疾病なり、と疾病にもせよ、病癖にもせよ、人間と宗教とは斯の如く必然に共存せば、宗教學者はこの必然に共存する所以の原因につきて、一定の説明を求めざるべからざるなり。

(十) 拜物教

吾人の祖先は野蠻の狀態なりし事は、争ふべからざる事實なり、其の知識感情は小兒の如く、數を知らず、色を識別せず、一物と他物との別を知らず、高等動物と下等動物との差異を知らず、物の滅する所以を知らず、生ずる所以を知らず、何故に大陽大陰の昇降あるやを知らず、何故に四氣の順還あるやを知らず、故にこの世界の事物の千狀万態極りなき變化の現象を見ては、唯驚怪の念を起すのみなりしなるべし、彼の怒れる風の鳴れる動物の咆哮する、大河の汎濫する、樹木の生成する、禽鳥の飛揚する等、彼等野蠻人の目には、一として不可思議ならざりしはなし、乃ちその中の或る物は恐ろしく、或る物は怪しく、恐怖と疑懼との念は、その物を崇拜するの情を起すに至らざるを得ず、こゝに於て乎、万物崇拜の念を生じて、以て宗教の發芽を見しなるべし、故に宗教

の最も初に行はれしもの、即ち野蠻時代に行はれしものは、拜物教なりきと云はざるべからず。

この拜物教を生じたるに至る所以につきては、以上の理由の外、又一の理由あり、野蠻人がその運命に惑ふ所以の思想感情これなり、生死、存亡、疾病、缺乏等、その運命の不可思議なるに惑ひ、之に恐怖疑懼して、以て之をその周囲の物に何等かの靈力ありて爲す所なるべしと感ずるに至る。蓋し野蠻無知の人は、物の優劣力の有無を解せざれば、周囲の物も亦己と同じく、心意あり、思念ありとなすが故に、我運命はその物類の思念に由るものなりと推理すればなり、故に一は自然万物の不可思議に驚ひて之を崇拜し、一は之を自己の運命の支配者として崇拜するに至りしならん、大陽は光明の施與者にして、又暖氣を吾人に與へ、吾人の生命を全うせしむる神となり、雨は水を與へ、雪は寒氣を與ふ、是等の物も亦愛して崇拜すべく、怖れて崇拜すべき神となるなり、カルデア、ペリウ、埃及の如き大陽を神なりとし、亞弗利加の土人の如き木石を神なりとせり。

(十一) 動物崇拜教

物を崇拜するは之を不可思議なりとすればなり。静止せる物にして不可思議ならば、活動する動物は更に不可思議ならざるべからず。こゝに於て乎、動物崇拜教起らざるを得ず。埃及の如き、テグロの如き、人よりも動物を以て靈妙なるものなりとして之を崇拜するなり。埃及人の之を崇拜せしにつきては別に理由あり、第三章を見よ。然れども、斯の如く動物を崇拜する所以のものは、その教へられずして有する本能の、誠に不可思議に感せらるるを以てならん。その内に靈力ありて以て之を爲すものなりと感じたるが故ならん。斯かる時代の人民の信仰心にては、風の颯々として吹くは、風即ち神なればなり。山の堂々として立てるは、山即ち神なればなりとするのみならず、路傍の一小石を拾ふて一の吉事あれば、即ちその石は忽ちに大吉神として祭らるべし。我國の祖先が國に靈ありとして生國魂として祭り、山に靈ありとして大山主の神として崇め、又海に靈ありとして綿津海の神として拜したりしか如き、又或る地方の如き、犬を靈あるものとして大神を祭り、狐を靈あるものとして稻荷の眷族としたるか如き、恐らくは皆動物崇拜教、又は拜物教の片影なるべし。

(十二) 拜鬼教、及祖先教

拜物教、動物崇拜教は、その本意を尋ねれば、物類又は動物に依りて、現はされたる自然の不可思議力を崇拜するものならざるべからず。然れども、この二教は未だ現象に就ての信仰にして、その奥に不可思議力ありとして、之を信仰するは、進歩したるものにあらず。然るに人類が少しく進歩するや、直ちに思ひ至る所のものは、我身と我心との區別なり。此の區別を知るに至れば、心の存在の不可思議なるに驚怪して、以てその靈力を崇拜するに至るべし。乃ちこゝに幽鬼の存在を信仰し、拜鬼教を生ず。拜鬼教は世界に善或は惡の靈魂、即ち幽鬼ありと信するもの、而して、その幽鬼を我祖先の靈なりとするとき、祖先教となる。拜鬼教、祖先教は西はウラルの山脈より、東は我國、南はヒマラヤの山脈より北は北海に至るの間、(即ちモンゴールの人種より、サイベリヤ種族、オビ、エネシ、兩河の沿岸に住する種族に至るまで) 幾んど一般に是あらざるはなきなり。天地の創造を以て我祖先の爲す所なり、我祖先は神にして、萬物をも造りたるものなり、大陽も、大陰も、我祖先の靈にして我等はその子孫なりとなす所の宗教の如き、祖先教なり。

(十三) 偶像教、及多神教

祖先教、拜鬼教は拜物教、動物崇拜教に比すれば、物をれ自身、即ち現象の物を拜するに  
 あらずして、少なくとも之に越へたる靈力の存在あるを認めたるものなれば、一段の  
 進歩なり、然れども、未だ吾人の靈魂の外に尙之に越へたる靈力、即ち人類、若しくは動  
 物、又は物類にあらざる神あるとを認め得ざるものなり、されば、こゝに今一層の進歩  
 あれば、即ちこの神を認むるに至るべし、神と云へる思想は前にも説きたるが如く、ア  
 リヤン人種の中に古くよりありし所のものにして、その他の人種にも亦同様なりし  
 が如しと雖、この神を信するの思想は、種々の形状を以て現はる、之を無形にして唯一  
 の存在物とせず、有形の存在物にして、吾人は之を常に見るとを得ずと雖、この世界に  
 多くあるものなり、其の形は斯の如きものなりとて、之を繪畫とし、之を肖像となし、以  
 て之を信仰崇拜するもの、之を偶像教、又は多神教と云ふ、偶像教、多神教は之を拜鬼、祖  
 先の二教に比すれば、或る神聖なる存在物を認めたるものなれば、稍や進歩したるも  
 のと云ふべし、然れども、若し宇宙に多くの神ありとするも、その身形は吾人が知るこ  
 とを得る所なるべきか、是今日の理論の許さざる所なり、拜物教よりは高尙なりと雖、

(十四) 一神教

而かも、拜物教に比して精神を異にしたるのみ、物を拜するに至りては、即ち一なり、又  
 偶像教は往々拜鬼祖先の二教と混することあり、幽鬼祖先の偶像を造りて、之を崇拜  
 するが如きこれなり、埃及、希臘、羅馬、スカンヂナビヤの古教等は、皆多神教、偶像教なり。  
 (十四) 一神教  
 之に反して、神は無形にして唯一の存在物なり、他に亦神ありと云ふべからず、宇宙は  
 一神の統御する所にして、吾人はこの一神の外に信すべきものなしとするものは、最  
 一神教なり、多神の存在を許せば、神と神との間の嫉妬、戦争等もなかるべからず、埃及、希臘、羅馬  
 べからざるのみならず、神と神との間の嫉妬、戦争等もなかるべからず、埃及、希臘、羅馬  
 スカンヂナビヤの古教の神は、實に斯の如きものなり、斯かる神は人類と異ならず、  
 唯神の國と云へる別世界にあるものなるのみ、而してその國ありやなしや知るべか  
 らず、その神等の高貴、偉大神威も崇むべきにあらず、人智進歩して思をこゝに致せば、  
 斯かる神の像を崇拜するは、愚者の事なりと感せざるべからざるなり、こゝに於て、  
 總て神と云へる不可思議物の存在を全く否認するか、否らざれば、神は決してさるも  
 のにあらず、唯一無形にして最上完全なるものなりとするに至らざるを得ざるべし、

故に一神教は宗教思想の最も進歩したるものなりと云はざるべからず。

(十五) 宇宙の不可思議力

宗教の起源に遡りて考ふれば、斯の如く人類が宇宙万有に對したる驚怪の念と、自己の運命に對する疑惑とよりして、その不可思議力を信仰崇拜するの念を生じ來り、こゝに宗教を成立せしめたるものなりと斷ずることを得べし。而して、この二つの不可思議力は、實に人智の測り知るべからざるものにして、誠に宇宙万有の奥に何者か靈妙なる存在物ありて、之か原因となり、之か支配をなす所なるが如くに感せらるるものなり。素より人の運命は人自から造くる所にして、天の爲す所にあらず、神の命する所にあらずるの理は、今日の文明人が既に知る所ならん。然れども、時に遇然なるものあり、吾人の豫想すべからざる運命を吾人に與へ、頗ぶる吾人を翻弄することを免れず。故にこの二大不可思議力は、野蠻の古と文明の今日と、その見る所を異にし、古に不可思議なるもの(木石、河流、動物等)は、今日の不可思議物にあらず、又その運命の支配者としたるもの(物類、動物、祖先、幽鬼)は、今日の運命の支配者にあらずと雖然れども、その精神を問へば、古も今も、宇宙の不可思議力を驚嘆畏懼して之を信仰し、之を崇拜するは

一なり。今日の文明人か唯一の神として信仰する者も、古の野蠻の民か物類、動物、幽鬼、祖先又は多くの偶像を神として信仰したるものも、その形狀こそ異なれ、精神に至りては同じく、宇宙の不可思議力を指したるものなり。此の不可思議力は吾人の經驗すべからざる超越界にあり、即ち超自然力なり。吾人は一歩々々、經驗を擴むるに依りて、この超越界を蠶食し、古に超越界としたるもの(物類、動物、幽鬼、祖先等)を超越界たらしめざるに至れりと雖、而かも、この超自然力は尙未だ盡きざるなり。

(十六) 適當の定義

故に宗教の適當なる定義は、左の如きものならざるべからず。曰く、

宗教とは宇宙の原因と、人の運命とに關したる超自然力の信仰なり。

而して、この超自然力の信仰は、人種の住所、性質、并にその詩人、哲學者の想像、及時代の勢力の爲に、其形狀を異にし、又文明の進歩、科學の發達の爲に、その信仰の形式上の目的物を異にするものなり。

されば、見よ、科學的知識の未だ發達せざるや、自然の理法に支配せらるる、物類、動物を以て超自然力として信仰したり。次に幽鬼、祖先を崇拜したり。次に多くの神、即ち偶像

を信仰したり而して、是等の物を信仰するにつきて、亦人種の住所、性質に依りて相異なれり。北極に近きスカンデナヴィヤにては、熱の神は善神にして人種の良友なりき。と雖、赤道に近き埃及にては、暑を掌とる熱の神、タイホンタイホンは悪神なりき。科學的知識の進歩したる今日の文明人は、物類、動物、幽鬼、祖先を神として信仰せず、祖先を祖先とし、は尊敬すれども、又多神、偶像を信仰せずして、唯一の超自然力を神として信仰するなり。

是故に今日の宗教は、今日の知識に根據する所なかるべからず。拜物教、動物崇拜教、拜鬼教、祖先教、偶像教、多神教の如きは、科學的の知識に於て神と認むべからざるものと神とするものなれば、以て今日の宗教たりがたし。一神教と雖、其の説く所今日の知識に依らずば、又今日の宗教たりがたからん。吾人が科學的の知識に據り、確實に推理して、誠に超自然力と認め得べき存在に向いて信仰を捧げ、以て宗教を組織したるときに、その宗教鞏固なるべく、否らざるべきに、その宗教薄弱なるべし。

### 第三章 埃及、希臘、羅馬、及スカンデナヴィヤの古教

#### (一) 最古の國、最古の宗教

史家は概ね埃及を以て最古の國とし、又最古の宗教を有したりしものとせり。然れども、メンズセイイスの説く所に據れば、埃及よりもバビロンを古國とし、又最古の宗教を有したるものとし、埃及の宗教はバビロンより移れりしものなりとせり。其の理由とする所を問へば、紀元前三千七百五十年「セミチック」人種がバビロンを征討せざりし以前より、バビロンはその國を立てたり。當時の人種は「セミチック」ならずして、「チラニヤン」なりき。埃及の「パンテオン」(祭廟)はバビロンのものと同じく、その宗教亦バビロンより移れりしものなりと云ふ。然れども、佛の學者に「ブロンジョン」が、中央亞米利加のメキシコ森林を探検すること十二年、種々の材料を蒐集して、而して考定したる所の説に據れば、人類の起源はメキシコ灣の半島「ユカタン」にあり、その人種海を渡りて埃及に移り、埃及より更に亞細亞、歐羅巴に移りたりしものなりとせり。此の説果して然らば、埃及はバビロンよりも古國なり、その宗教亦古しと云はざるべからず。バビロンの宗教の埃及の宗教に似たりし所あるは、即ち埃及の宗教のバビロンに移りたりければならん。是等の説はいづれも信すべきか、今俄に判断すべからず。と雖、埃及最古の國



王の時代は、ポックは之を紀元前五千七百二年とし、レノルマンは之を五千四年とし、ラタスは之を四千四百五十五年とし、レブシヤスは之を三千八百五十二年とし、パンセンは之を三千六百二十三年とし、その他の諸氏三千年より二千七八百年前とせり。されば、之を紀元前凡そ三千年の古より存したりし國なりと見ば大過なかるべし。然るに、バビロンはチュラニヤン種の時代、紀元前二千年、セミチック種の時代、同じく二千年より千五百七十年、エラミチック種の時代、千五百七十年より千五百四十五年、アラビヤンの時代、千五百四十三年より同じく二百九十八年なり。是ラウリンソンの説く所にして、その他の學者も亦概ね一致せり。こゝを以て、余は埃及を以て最古の國、又最古の宗教を有したる國なりと假定するを有理とす。

(一) バビロンの宗教

埃及の宗教を説く前に、此の宗教を移植したるものなりと想はる、バビロンの宗教に就て一言を費すべし。バビロン人は幽魂を崇拜したり、之を「ズイ」と云ふ。「ズイ」は人に禍福を與へ、吉凶をなす所のものにて、その數多しとせり。又動物をも崇拜したり。バビロンの神は埃及、又は希臘の神に似て、動物の形したるもの多し。鷲の首を有し、人の

體をなしたる神あり、動物の背に立ちたる神あり。今その重なる神を記せば、「アヌー」と云へる、天の神あり、諸神の父なり。「シン」と云へる、月の神あり。「ベル」と云へる、地の神あり。「フィー」と云へるは下界の神、「イシユター」と云へるは戰の神にして、又愛の神なり。この諸神の父なる天の神「アヌー」は、埃及の「アモン」(諸神の王)に同じ。恐らくは之を移せしものならん。

「セミチック」種族がバビロンを征討せざりし前のバビロンは、「セミチック」種にあらざりて、「チュラニヤン」種なりき。而して、斯の如く拜鬼教を有せり。又埃及に似たる動物崇拜教を有せり。惟ふにその拜鬼教はバビロン人の固有にして、動物崇拜教は之を埃及より移植せしものならん。

(二) 埃及の人種

埃及の宗教、及神の事を説かんとすれば、即ち埃及人の何れより來れるものなりしかを問はざるべからず。昔日にありては、埃及人は亞弗利加の内地より來りしものなりと想像せられたりと雖、今日にては之を非として、却て海濱より來りしものなりとせらる、その文法は「セミチック」種のものに似たりと雖、その單語法は同じからず。「アリアン」

に似たる所もあり、セミチックに似たる所もありと云へば、惟ふに諸方より集合したりし人種ならん。

(四) 埃及の古教

抑も埃及の宗教は動物崇拜なりき。然れども、その動物崇拜の理由に至りては、高尚なるものありて存せり。蓋し埃及人は種々の神ありて、天地万物を造り、又人の運命を支配するものなることを信したり。然れども、この神は形を物に借るにあらざれば、人の前に現はれざるものなりと信したり。而して、動物は實に神の形を現はしたるものにして、形體既に神聖なり。犬は夜警信義の靈獸として崇拜すべく、鷹は空中飛揚の神鳥として崇拜すべし。神はその形を動物として現はし、人が如何なる事をなすかを見んが爲に出て來れるものなれば、動物それ自身は貴ぶべからざるも、その形體即ち神なれば、崇拜すべきなり。

斯の如き理由を以て動物を崇拜せしが故に、埃及の神殿を訪へば、金銀珠玉を以て飾りたる堂宇の中に、或は猫、或は牛の如き動物の像、儼然として安置せらるゝを見る。その奇觀笑ふに耐へたりと雖、然れども、埃及人は敢て神と云ふ精靈的存在物を知らざ

りしにわらず。唯之を印度の波羅門教の如く、無形にして時と空とに超越したる無限永久の精靈、即ち波羅吸、摩梵天王なりとせずして、時と空との中を占有したる形體となしたるものなり。故に波羅門教を精靈的凡神教なりとすれば、埃及の宗教はその反對なる形體的多神教なり。抽象的の神を崇めずして、具像的の多神を崇めしものなり。即ち動物を以て神の存在の形體とし、その形體を崇めしものなり。故に埃及人は形體を重じ、之を神聖なるものとし、人の身體の如き、之を滅せしむべからずとして、木乃伊となし、永く保存して之を崇拜せり。ピラミッドの如き、歴代帝王の墳墓の中に、その帝王の身體を保存し、以て之を神聖なるものとするが如き之が爲なり。

(五) 三種の神

されば、動物崇拜とは云へ、動物それ信身を信仰するにあらずして、其の形體を神の實現となすものなり。動物の形體を以て現はるゝその神は、如何なるものなるかと云ふに、その神に三種あり。第一種の神はその數八にして、その名を「アモン」「ヘム」「マット」「ナム」「セト」「フター」「チット」「ラー」と云ふ。この神等の名に就ては、異説ありと雖、今之を省く。「アモン」は絶對の精靈にして、諸神の王。「ラー」は大陽なり。是等の神は天地創造の神に

して、精靈的のものなり。第二種の神は創造の神等の子にして、第三種の神等の父なり。「クワンシユ」強盛の神、「トート」知の神、「ヘナタ」生の女神、「アソル」愛の女神等なり。第三種の神は第二種の神の子にして平民的のものなり。この種の神は最も普通に信仰せられたるものにして、動物的形體を以て現はれたるものは、此種の神多し。この神の中に、最も上位にあるものを「オリシイス」神とす。之に次ぐを「イシス」女神とす。即ち「オクシイス」神の皇后なり。次に「タイホン」熱の神にして破壊の神なり。次に「ホーラス」恢復の神なり。而して、是の種の神は人と同じき傳記を有したるものにして、その像は或は金牛「オリシイス」の如き、或は羊首人身「アモン」の如きなり。埃及古教の天地創造説に據れば、「アモン」天地の根本たり、「ラー」太陽を生み、諸神々共に万有を造るとせり。こゝを以て「アモン、ラー」と呼び二神を一神として崇拜せし時もありきと云ふ。之を別言すれば、第一種の神は天神にして、第二種の神は地神、第三種の神は人神とも云べきか。而して、第一種の神の信仰は絶対的精靈を信するものなれば、「アリヤン」若しくは「セミナック」人種の宗教思想にして、第三種の神の信仰は、即ち動物崇拜、偶像崇拜なれば、亞弗利加人種の宗教思想なり。此の宗教思想に依りて推測すれば、埃及人は一は「アリヤン」又は

「セミナック」一は土着の亞弗利加人より成りしものならんと想はる。

(六)「オリシイス」の神傳

「オリシイス」神の傳説は一ならずと雖、而かも、ヘルシヤ教、波羅門教の三位説と同一なるものあれば、こゝに之を摘記すべし。抑も「オリシイス」神は光明の神にして生々の神なり。「タイホン」はその弟なれども之に反して暗黒破壊の神なり。「ホーラス」は「オリシイス」の子にして、恢復の神なりとす。「タイホン」は「オリシイス」神を殺し、「ホーラス」は「タイホン」を破りて、恢復の業を遂げ、こゝに「オリシイス」は死の國なる、西の王國に行き、その治者となり、死者を保護し、又之を審判する神となれり。之をその神傳の大要とす。埃及人はこゝを以て「オリシクス」「ホーラス」を光明の神として深く崇拜讃美せり。この神傳は宇宙の生々力、破壊力、及恢復力の交々順還して天地万物を成すものなることを偶語したるものなりとせらる。波羅門教の「ブラマ」「シヴァ」「ヴィシユス」「ヘルシヤ教」の「オルムツツ」「アリーマン」「ミトラ」亦生々、破壊、恢復の三方の神なり。「オリシイス」は「ブラマ」「オルムツツ」に、「タイホン」は「シヴァ」「アリーマン」に、「ホーラス」は「ヴィシユス」「ミトラ」に當れり。斯の如く三位説の三教幾んど一致せしは、亦奇なりと云ふべし。

(七) 希臘の古教

希臘は埃及に次ぎて古代文明の發現せし國なり。哲學を初め諸科學、諸技術の發達せし所なり。されば、その宗教も亦進歩せざりしにはあらずと雖、其の古教は多くは埃及に負ふ所のものなり。然れども、希臘は國土少なりと雖、古代に於て行通に最も便利なる海を三面に扣へ、東西にフェニシヤ、小亞細亞、西南に埃及あり、亞細亞的思想と埃及の文明と兩々之を輸入して、能く調和すべき便利を有せり。故に希臘の古教は埃及の宗教の勢力を被ふる所ありと雖、而かも、亞細亞的思想を混せり。埃及の凡物的形體的信仰と亞細亞の精神的、無形的信仰とを調和して、之を人的とせり。こゝを以て、埃及の神は精靈の符號なる形體のみなりしと雖、希臘の神は之に反して生命あり、血あり、美にして愛あり、冒險をなし、戰爭をなす所の人の如きものなり。精靈の符號にあらずして、人格ある一個の存在物なり。故に埃及にては、神を形體化せしめ、符號化せしめたりしと雖、希臘にては之を人間化せしめ、オリムパス山を以て、その重なるものゝ住居とし、その他にも亦神の住居ありとしたり。人の如く憤りもし、戦ひもし、智力、腕力、剛美の差もありと雖、一般に健康にして完全に、又不滅のものなりとしたり。その神の重なるものは十二、即ち「ユニウス」「ポサイイドン」「アポロー」「アレクス」「ヘフェストス」「ヘルムス」「ヘラー」「アゼナー」「アルミテス」「アフロダイト」「ヘスタチア」「テメター」等なり。而して、この他の小神は無數なりとす。

希臘の宗教の他に異なりたりし所は、之を開きたる祖師なく、經典なく、又僧官といふもなきにあり。唯有するものは「ホーメル」「ヘシオッド」の詩篇にして、之を經典となしたりしのみ。希臘の神は、是等の詩篇中に記されたる人間的の諸神なり。但し「ヘシオッド」の詩篇には、前掲の諸神の未だ世に出でざる前に、許多の神ありし事を云へり。その中の第一種の神は、天地創造の神、第二種の神は、その子等にして、第三種の神、實に前掲の諸神なり。又第一種の神は、万有の靈力を指せるものにして、未だ人間化せず。之を埃及の宗教の三種の神に比す、蓋し大に似たりし所あるなり。

(八) 希臘の神

希臘は進歩の人民なりき。その智力藝術の進歩驚くべきものありしなり。宗教も亦從て進歩なきにあらざりき。以上に説けりし神の性質の如きも、亦實に變化する所ありたりき。其の初は埃及の神の名に似たるものあり、その性質の譬へは創造、智慧、強力等

の諸神ありとして、之を崇拜せしか如き、同じきものありしのみならず、その諸神の形體も、埃及の如く動物的なるものあり、以て大に埃及宗教の影響を被れる事を知るに足れるものありしと雖、希臘の文明進歩するに従ひて、その神の性質の説明を異にするに至れり。その第一に神の性質を説けるものを詩人とし、第二は美術家にして、第三は哲學者なりき。

(九) 詩人の神

希臘は詩人の國なりき。従てその神傳は一切詩的なりき。其の詩的に述べられたる神の性質、即ち詩人の神は、極て人間的なり。勿論人間よりは高等なるものとして描かれたりと雖、而かも、情あり、智あり、意あり、痴にてもあり、貧にてもあり、總て人間の如くにして、唯少しく高尚なるものなりしのみ。故に前にも云ふ如く、神は戦争をなせり、憤怒もなせり、盜賊さへも働ける神ありしなり。斯の如く詩人の唄へりし神は、人間的なりしと雖、然れども、その神等の根本万有の靈力なる事は、之を忘却し去らず。『ジュニス』は天の神、雷の神、『アポロー』は埃及の『ラー』に當るは太陽の神、『アルテミス』は月光、純粹、貞操、寒冷の神なることを述ふるに於て、缺くる所なく、雷神『ジュニス』は雷電の轟々として

恐るべき性質あることをも述べたりき。

(十) 美術家の神

然るに、美術家はその詩人の忘れざりし所のもの、即ち萬有の靈力を除き去りて、純然たる道德的の神として之を製作せり。即ち『ジュニス』は唯世の統治者たる有力、有徳の風采のみを備へて、更にその雷神たる激烈の容なく、平和の徳、平和の力のみ滿ち充ちたるものたらしめたり。『アイデヤス』の作れりきと傳ふ『ジュニス』の像、以て之を證するに足ると云ふ。又、『アポロー』と共に立てる『アルテミス』、即ち『ジュアナナ』女神の像は、詩人の寫せりしが如き、冷酷の氣あることなく、反て清き事、月光の如く、美しき事、花の如く、理想的處女の標本として清姿純容、誠に仰ぐべきものに作られたりき。故に詩人の手に依りて人間化したりし神は、更に美術家の手を経て、大に之を純粹のものたらしめりたきと云ふべし。

(十一) 哲學者の神

然れども、詩人も、美術家も、未だ多神教徒たることを免れざりき。然るに、哲學者は自由思想を以て、萬有の原因を探ぐるを以て、その分としたるが故に、宗教的傳説に惑はず、

全く之に離れて、天地萬物の原因を論究せり。論究して、こゝに一神教の教理と一致するに至れり。即ち一方に於ては「アイヲニヤ」哲學の實在論、一方に於ては「エリヤ」哲學の唯心的教理起り、一は天地萬物の原因を一の實在と認め、他は之を一の思想と認め、二つながら唯一の神を認むるに至れり。就中ソクラテス、プラトーン起るに及びては、一神説を講ずること有力にして、プラトーンの如き、當時の實在論と唯心論とを調和圓融して理は一なり、實は多なり、實の多は理の一の分殊なり。上に最上實在の理想即ち唯一神ありて、萬物之より成るとなすに至り、一神教の教理は、こゝに分明となれり。乃ち希臘は哲學者に依りて、唯一神教の教理を教へられ、他日基督教の行はるゝ準備をなしたりと云ふべし。

(十二)羅馬の古教

羅馬は羅典人種の國なり。其の古代に於ては、四方を征伏して雄名を振へりきと雖、その人種は發明創造の力を缺けり。故に羅馬人の創造發明せるものやては誠に稀有なりき。従て宗教も亦自國の創始にあらずして、他國多くは希臘より輸入せしものなり。然れども、その人種は自から又固有の氣風ありしを以て、之を國民化したるに至りて

は、亦驚くべきものありとす。

羅馬人の特質は國家的なるにありき。何事も國家の犠牲に供すべきものなりとなしたり。何人も國家に服従せざるべからざるものなりとなしたり。斯かる特質ある國民に入れる宗教は、又この特質に化せられて、國家の從屬物となりたり。國定宗教、國立教會、これ羅馬人の宗教事業の主たるものなりき。然れども、思想の自由は之を許せりしが如し、有名なる學者「セロ」の如き僧官としては國教を信じ、一個人として、即ち哲學者として、之を批難したりし迹あればなり。

國定宗教なりきと雖、斯く思想の自由ありたれば、諸方より入り來る人民は、國法に戻らざる限りに於て、自己の宗教、自己の神を信じたりき。猶太人は猶太教、埃及人は埃及の神、希臘人は希臘の宗教を信じつゝ、羅馬の國內にあるも國法に戻らざる限りは、各めを得ざりしなり。後年基督教がこの國に入りて大なる勢力となりしも、斯かる慣習ありて迫害は被りしかども、比較的は布教に便ありたればなるべし。

(十三)羅馬古教の神

羅馬の宗教は、諸國殊に希臘より輸入したるものなりき。その神も亦輸入の神多く、希

臘の神殊に多し。羅馬人の自から造れる神は、毎事、毎物、必ず一神を有すとの當時の信仰よりして、僧官等の造れる神、譬へば貨幣(ベキウス)即ち家畜の行使あれば、ベキウニヤ女神を祭り、銅貨の行使あれば、エスキウラナス神あり、銀貨の行使あれば、アルゼンタリヤス神を説くが如きものなりき。

羅馬の神は多くは、希臘の神の移住したるものなりと雖、その性質は一變したり。希臘の神は想像的、詩的なりしかども、羅馬に來りては、實際的、散文的となれり。希臘の神は人情の、人格的なりしかども、羅馬の神となりては、器械的、職業的となれり。故にヘーゲルは、羅馬の神は希臘の神傳を借れりし時だにも、希臘の神の如く人格あるものにあらずして、靈魂なき器械の如きものなりきと云へり。要するに、羅馬はケルツ種族(西歐洲に住したる人民)と希臘人種との特質を混和せる制度と人民とを有したるものにして、その神も亦この兩特質の混和なりき。是猶埃及の宗教が亞細亞的要素と、亞弗利加的要素との混和になり、希臘の宗教が埃及的要素と、希臘的要素との混和になりしに同じ。

羅馬の神はその數多し。その中にて第一に數へらるゝ神は、ジュアナスなり。是開閉終始

の神にして、その名の「ジュアナス」は「ジュアヌア」門又は窓より出でたるものなり。「ジュアヌアリ」(一月)と云ふ語はこの名より出でたりと云ふ。蓋し羅馬人は始を貴ひたるを以て、之を崇め祭りしならん。此の神に次げる神を「ジュアピター」ジュアノー「ミネルヴァ」とす。「ジュアピター」は希臘の「ジュース」神に同じく、天の神なり。「ジュアノー」は天の女神、處女の友、愛の神なり。「ミネルヴァ」は智の神なり。この三神は力と愛と智とを表したる三體の神なり。この「ジュアピター」Dupierなる語は「サンスクリット」の「ジュアスピター」[Jans-Pitar]又は「ジュピター」[Sin. Pitar]と云へる語より出で、天の父又は光明の父と云ふ義なり。希臘の「ジュース」Gensも亦「サンスクリット」の「ヂア」[Gen]又は「ヂニ」[Gin] (即ち天又は日の義)より出で、「ジュアピター」に同じ。又「ジュアナス」は希臘の「アルテミス」女神(別名「ジュアナア」)に同じ。羅馬の神の希臘の神より來れりしこと、以て知るべきなり。

以上の神を第一級の神とし、第二級の神は前に云へる僧官の造る所の神なりき。一事、一物に神ありとして、次第に造り行くものなれば、枚舉に遑わらず。第三級の神は希臘の十二神、その他の神の或は名を替へ、形を變し、又は土着の神と併合して現はれたるものなり。うの外自然の勢力、譬へば太陽を「ソール」大陰を「ルーナー」嵐を「テンヘスタツ

トス」として崇めたるが如き神數十ありとす。

(十四)羅馬古教の衰廢

羅馬は基督舊教を以て開ゆるの地なり。然るに、その古教は斯の如き多神教にして、又偶像崇拜なりき。この多神教が如何にして一神教なる基督舊教に變じたりしか、蓋し一疑問なりと云ふべし。こゝに少しくこの疑問を解かん。

抑も羅馬の古教の衰廢したるは、二つの原因に由る。一は個人的運動なり。一は哲學上の議論なり。前に云へるが如く、羅馬は國家主義の國にして、個人あるを忘れ、個人は遂に國家の奴隸たるに至れり。然るに、希臘の文明は進歩し、個人主義も發達し、哲學も亦發達せり。而して、羅馬に入り來りしかば、こゝに國家主義、中央集權主義に反したる個人的運動起るに至れり。加ふるに當時の哲學者は、希臘より哲學思想を輸入し、或は、ストイック流、或は、エピクラン流の説を立てたり。シセロの如き、身は僧官たりながら、余は我祖先の教訓、并に傳説に従ひて、諸るの神あることを信ず。然れども、若し道理に依らしめば、余は勿論是等の神の存在を非とせざるべからず」と公言するに至れり。こゝに於

て乎、教育ある羅馬人は、ジュリアナス、ミネルヴァ等の神あるを信せず。その古教は單に俗人間の迷信となり了はりぬ。この時セネカの如き學者出で、ストイック流の凡神論を唱へ、世界に一の神あることを教へたりければ、こゝに羅馬の古教は衰廢するに至りたりき。

此の時に當りて、一神教を教ふる所の基督教は入り來れり。乃ち基督舊教は羅馬に於て、遂に世界的大勢力を得たりしなり。

然れども、羅馬古教の特質は、前に説ける如く、法制的、統治的、中央集權的なり。基督教の精神は自由主義にして、個人主義なりと雖、この國に入りては、又この特質に化せられざるを得ず。乃ち之に化せられて、組織的、法制的、中央集權的となり、羅馬カソリック教として法王教治となり、信者は自己の信仰に依りて贖罪せらるゝにあらすして、宗教に服従するに依りて贖罪せらるゝものなり。法王の教權に服従するは、即ち贖罪せらるゝ所以なりとなすに至りぬ。羅馬カソリック教が自由の精神に乏しくして、法治的形式的なる所以のものは、之か爲なり。

(十五)スカンヂナビヤの人種



スカンデナヴィアの宗教を説くに當りては、先その人種の事より初めざるべからず、抑も「アリヤン」人種の根元は、裏海の東に當れる中央亞細亞にあり、源をこゝに發せる「アリヤン」人種は、南方印度に移り、北方歐羅巴に移れり、印度歐羅巴人種即ち是なり、此の印度歐羅巴人種の一派なる「ネートン」人種即ち日耳曼人種は「ケルツ」人種に次ぎ、「スラヴ」人種の來らざりし前に歐洲に入り來りて其の中央より北部に占居したり、スカンデナヴィア人種は、此の日耳曼人種と同種にして、スカンデナヴィア半島に占居したりしものなり、諾威、瑞典、丁抹等の半島は、皆この人種の占居したる所にして、歐洲北部の文明は源をこゝに發せるものなり、故に日耳曼人種の宗教、并に文明と、その近世の文明に及ぼせる勢力とを究めんとすれば、即ちスカンデナヴィアの宗教、并に文明を究めざるべからず、蓋しその歐洲近代の文明に及ぼせる勢力に至りては、決して鮮少なからざればなり、モンテスキウはスカンデナヴィアを歐洲自由の大源なりとし、ゲイゼルはその文明の獨立的にして、歐洲が羅馬の勢力に風靡せられざる前に、既に一機軸の社會的狀態を保ちしことを説けり。

南方歐洲の文明は、其の人種の特質に依りて、其の宗教の法制的、統治的、中央集權的即

ち羅馬古教の特質なりしと共に、國家的なりき、然るに北方歐洲の人種は獨立不羈の精神に富みしかば、宗教も亦之に準じ、之に因て其の文明は個人的、自由的のものなりき、故に歐洲全體の文明を一言に評下すれば、南方よりして文學、哲學、法律、美術を得て、統一的體制を養ひ、北方よりして權利、自由精神、人格を得て、獨立的、個人的元氣を養ひ、此の調和發達に因て、以て之を得たるものなり、南方文明の原因は希臘、羅馬なり、北方自由の精神は日耳曼、殊にスカンデナヴィアなりと云はざるべからず、余は歐洲の強盛を見、更にその文明の原因の斯の如く統一的、國家的と、自由的、個人的との兩要素にありしを見、誠にその偶然ならざるを知る、若し唯その南方の文明のみを貴び、國家至上權、設個人の説のみを執らんか、是決して眞の文明に進む所以にあらざるなり。

(十六) スカンデナヴィア宗教の精神

斯の如くなれば、スカンデナヴィアの宗教は、頗る研究の價值あるものなり、今その宗教の中央思想を略述せん、その信仰の中心たるものは、神の自由の意志と、之に反對せる自然の勢力との抗爭、精神と物質との戰爭なり、こゝを以て、スカンデナヴィアの神は常に戰を主とせり、日光、清夏、成長と、風雨、嚴冬、霜雪、大洋との戰爭を意味せり、神既に斯

の如し、人も亦然り、乃ち生命と死と、自由と運命と、善と惡と、正と邪との争をなすもの、即ち人なり。光と熱との神は人民の益友にして、暗と寒との神はその讎敵なり。埃及に於て熱の神なる「タイホン」が惡魔なるが如く、スカンヂナビヤにては氷の怪人は惡魔なり。斯く世界を戦争と見る。眞理、正義、並に個人の獨立は、その大精神ならざるを得ず。依頼、扶助、同情と云ふが如き組織的の事は缺けざるを得ず。蓋し眞理を愛し、正義を張り、而して、個人の獨立自由を全うせんとすれば、勢ひ他の感情を問ふの迫あらず、同情を缺き、慈悲を忘るゝは免れざる所なればなり。抑も世界の宗教は道德の點に於て凡そ二方面に分るゝが如し。一は眞理、正義、自由を愛して、個人的、獨立的、冷酷的となるもの、一は同情、仁愛、慈悲を主として、獨立不羈の精神を缺き、柔和、柔弱、温順、忍辱に流れ、遂に奴隸的となるものこれなり。スカンヂナビヤの宗教は實にこの第一種に屬せしものにして、佛教の如きは第二種に屬するものなり。故に人の徳義は教爲にあり、獨立にあり、剛毅にあり、善の爲めに進んで戦ふにありとせり。若しこの精神のみならば同情を缺かん、仁愛を忘れん、乃ち冷酷とならざるを得ず。更に之に同情并に愛の精神を調和したらんには、柔弱ならず、冷酷ならざる、完全なる徳義たる事を得べし。後年、ルーテ

ルが一方に於て、基督教の愛の主義を提げ、一方に於て、その自由獨立の精神を振ひ、舊教に反して立てりしものは、實にその調和にして、又實にこのスカンヂナビヤ人種の宗教的思想に據りたるものなり。余は總ての宗教、總ての國家に於て、此の兩要素の調和の極て必要なるを知るなり。

(十七) 其の經典、並に神

スカンヂナビヤ宗教の經典は「エダアス」「サガアス」の二部なり。「エダアス」は二つに分れ、前の「エダアス」は詩的にして三十七章、後の「エダアス」は散文なり。「エダアス」は大祖母と云ふ義なりとぞ。この兩經典は神の讚美歌を以て、天地の創造、万物の道理を教へたるものなり。其の天地創造の説に據れば、天地の未だ開けざるや混沌たり。上に天なく下に地なく、海もなく、陸もなし。其の全體は唯大いなる無底の穴のみ。日月星辰亦あることなし。時に南に光明あり、北に黒雲あり。穴の中に毒流水結す。然れども、南方の暖光に依りて氷解して生氣あり。怪人「イミル」生ず。氷解の水滴よりして熱と寒との子を生じ、又「ボル」と云ふ神を生ず。「オデー」「ヴァイター」「ヴァイ」の三神を生めり。而して、種々の冒險ありて後遂に「イミル」を殺す。「イミル」の體二分して天となり、地となれり。是等の諸神

アスク、エムブラーと云ふ男女を造る之より混沌たりし天地全く消えて、この世界となり、オチーン「万物の父となれり」と云ふ初より戦争なり。されば、スカンヂナビヤ人種は「オチーン」を万物の父なりとし、之に次で「トール」「バルグール」「ジヤルト」「テール」等の神を信せり。

スカンヂナビヤの宗教は、斯の如く世界を初より戦争と見る。光暗の戦ひ、善悪の争ひ、即ち光と善とが、暗と悪とを征伏すべきものなりと見るなり。即ち二元論にして、能くペルシヤ教に似たり。ペルシヤ教の事は、第七章「ツラスツラス」教の部を見よ。蓋し二教共に善悪正邪の戦争を説けばなり。

(十八) 其の勢力

スカンヂナビヤ宗教は、今日に存するものにあらず。この宗教のありし土地は、今は皆基督教の行はるゝ所となれり。さればその勢力なきに似たりと雖、蓋し決して然らざるなり。前項十六項に云へるが如く、基督教の運動は、此の宗教の素養に成れる自由獨立の精神に基けり。羅馬の古教が羅馬の「カソリック」教、即ち基督教の法王教治を馴致したる原因なりしが如く、スカンヂナビヤ宗教は、基督教を起さしむる所以の

一原因たりしなり。蓋し基督教は基督教の統一的、法治的、壓制的、形式的なる法王教治に反して、自由と、獨立と、權利と、精神と、自信と、自覺とを以て起ち無限の服従と他力の信仰とを排したりしものなり。而して、此等のものは、實にその日耳曼人種の固有にして、又その古教の精神なればなり。クラーク曰く、北方人種がその本能、及その古教を有せざりしものならば、歐洲に於て、今日恐らくは基督教の隆盛を見ざりしならん。

第四章 猶太教

(一) 猶太の土地、及人種

讀者は史を讀て猶太の土地の希臘、又はスイツルランドの如く、小なりしことを知らん。又その土地の山に、谷に、海に限られて、一小區域をなせしことをも知らん。孤立せるが如きこの土地の人種が、孤立せる宗教を有したりしは、亦自然の理なりと云はん。即ちバビロン、アッシリヤ、フェニシヤ、カルサシニヤ等、隣國の宗教が多神教なりしに拘はらず、猶太は獨り一神教なりき。勿論是等の諸國殊にバビロンの如き、第三章第

二項に説けるが如く、一の最上の神「アム」の如きあることを信せざりしにはあらずと雖、第二以下許多の神あることを信じたりき。然るに、猶太人即ちイスラエルの民は之に反して獨り神は唯一なりとせり。曾に然りしのみならず、近隣の人民は或は木石を以て神の像を造り、或は動物木石を自身を神の形なりとして之を信じ、神の萬物の中にあることを信じたりと雖、猶太の民は神は萬物の上に高く超然たるものなりと信せり。されば近隣の種族は萬有神教的、又は拜物教、動物崇拜教的なるにも拘はらず、猶太人は一神教なりと云ふべし。

猶太人は「セミチック」人種なり。猶太教と云ひ、モハメッド教と云ひ、基督教と云ひ、皆唯一の神を信じ、又その神は萬物の中にあらずして、その上に高く超然として自から存するものなりとする一神教なり。而して、この三教共に「セミチック」人種の中に生じぬ。然るに、希臘、羅馬、スカンデナヴィヤの古教と云ひ、ペルシヤ教と云ひ、印度の宗教と云ひ、「アリヤン」人種の中に起りし宗教は、多神教なり。其の差異する所以のものは、抑も何に原因したるか。ルナンは之を論じて、「印度歐羅巴人種(即ち「アリヤン」)は、宇宙の差別相に執着したるが故に、その獨力にては、一神教に到着することを得ざりしならん。之に

反して、「セミチック」人種は反省、權理を用おずして、唯一の神を知り、純粹の宗教に至れる人種なりと云へり。然れども、マハメッド前のアッシリヤ、バビロン、セミチック」種到來後を云ふ、アラビヤ、カルサジニヤ、又恐らくは埃及の一部も、皆「セミチック」人種なりき。然るに、その宗教は一神教にあらずして、多神教、拜物教、動物崇拜教なりしならずや。勿論最上位の神ありて、諸神の上に立つとの思想は、「セミチック」人種の固有なりしが如しと雖、斯かる思想は「アリヤン」人種にも、亦なかりしにあらず。第七、第八の二章を見よ。されば、ルナンの斷定は事實に違へりと云はるべからず。

(二) アブラハムの神

こゝを以て、マクス、ミュラーはルナンに反し、「セミチック」人種全體に亘れる本能的感情なりしが如くに見ゆる、唯一の神の信仰も、その源を尋ねれば、唯これ一人(アブラハム)の信仰より出でしものなるのみと論じ、モーゼ、マハメッド、イエスの教へたりし唯一の神と云ふも、皆これアブラハムの信じたりし神に外ならずとせり。余は之を適當の判斷なりとす。

抑もアブラハムは紀元前二千年頃の人にして、實存せし人なり。舊約書創世記にその

家系を戴せたり。固より信じかたき點もなきにはあらずと雖、アブラハムを實存せし人にあらずと見るは非なり。アブラハムの父はテラと云ふ。アブラハムが唯一の神を信するに至りし内心の動機に至りては、今之を推測すること能はずと雖、一家の神、一地方の神と云へる思想に因する所深かりしは、明なるか如し。蓋しアブラハムの神は國民の神、世界の神と云ひがたくして、彼れ自身の家の保護者、良友たる性質のものなりければなり。加之ならず當時の風習に依れば、神も、宗教も、その家と共に世襲するものなれば、アブラハムの神も、亦一家相傳のものなるべく、之をその子イサクに傳へ、又之をその孫ヤコブに傳へたるものなりき。

この一家族の神なる唯一の神は、屢々アブラハムの前に現はれて、種々の事を命じ、又アブラハムの子孫をして大國民たらしむべし、カナンの陸をその子孫に與ふべしなどの契約を結べり。是等の事は舊約言に詳なれば、こゝに記さず。この神の名を「エホバ」と云ふ。故にアブラハムの信仰は、神を最上完全なるものとは見たりしならん。而かも、未だ一家族の神たるを免れざりしなり。大ひなる能力あるものなりとは見しならん。然れども、未だ全能全智とは見ざりしなり。唯一のものなりとは見しならん。然れども、

未だ他には決して神あるものにあらずとはなさざりしが如し。されば、一神教とは云へ、未だ純粹のものにはあらずなり。

(三) モーゼの教

猶太教はその崇拜信仰する所の唯一の神を、アブラハムより得たるものなり。然れども、モーゼなければ、その教は成立せざりしならん。モーゼは實に猶太教の開祖と云ふべし。

傳説にはモーゼの傳に關して種々の事あり。然れども、こゝには之を省くべし。モーゼは初埃及の王女に養はれ、その僧官となり、名譽と特權とを有したりしが、埃及人の猶太人を殘忍に遇するを見るに忍びず、夜竊に國を走りてアラビヤに至れり。即ち、モーゼは埃及の宮殿にありて不義の快樂を取らんよりも、唯一の神の民と共に、眞の神の道を傳へつゝ正しき苦みを取らんことを期し、こゝに豫言者として立ちしなり。惡をなすものは殺し、善をなすものは救はん。罪を犯すものには慈悲せず、不幸なるものは、充分の慈愛を垂れん。是モーゼの精神なり。嚴酷と同情と慈愛と、殘忍とを並せ有し、我信仰を共にする民には同情慈悲深く、之に反したるものには、嚴酷殘忍なりしもの、

是モーゼの性質なり。之を以て、モーゼがイスラエル人民の立法者として立てりしや、その律法は、正義の觀念を原とせしものなり。一は神の意、一は國民の意に依るとなせしものなり。宗教と正義と二様の制裁あるものなり。天啓にし且國約のものなり。神聖を貴び、清淨を重んじたるものなり。故にモーゼの宗教は律法なり。種々の清潔なる儀式を以て人民に神聖なる觀念を啓發せんとしたりしものなり。唯一の神は道德的にして善を好み、惡を嫌ふ。故にこの二つのものを同一に見ず。善人と惡人とは、決して之を同一に遇せざるなりと説けり。モーゼは斯く唯一の神を説き、之を最上完全なるものとし、天地を創め、萬物を造り、人を造り、又之を罰し、アブラハムに現はれて、種々の事を契約したりとなせしと雖、去りて、他の神の存在を非認せしにはあらず。他の神は唯一最上の神、即ち「エホバ」に従ふべきものなり。猶太人は唯この「エホバ」のみを信ずべきものなりと教へぬ。

モーゼの教へたりし唯一の神は、如何なる性質のものなりしがと云ふに、全く神人同形論に陥れしものなり。人は神の形に擬して造られたるものなれば、神は又人の形と同じく、而して、實に生命あるものなれば、即ち亦人の如く喜怒哀樂但し素より純潔な

れども、をなすものなり。之をモーゼが神の思想とす。

宗教にして未來を説かざるはなしとは、吾人の常に云ふ所なり。然れども、モーゼの「ペンテテック」(舊約書中の律法書)は之に關しては沈黙なり。蓋しモーゼは人の道德行為に報いらるゝ所の賞罰は、現在にありとなしたるものなれば、恐らくは未來の賞罰はなしと信せしものならん。又モーゼは神の偶像を造ることを禁せり。是見るべからざる神を、人爲を以て妄に見んことを欲するものにして、神を冒瀆するを免かれざるものなればなり。或はこの未來を説かざりし一事を以て、猶太教の宗教たる性質如何を疑ふものあるべし。然れども、近世の議論に據れば、未來の賞罰を恐れて、現在に正をなし、善を行ふべしと云ふは、是利己主義なり。利己主義は利他を本願とすべし。宗教道德に反す。故に未來を説くは、反て宗教にあらず。道德にあらず。靈魂不死は必ずしも宗教に要すべきものにあらずとせり。モーゼの未來に關して沈黙したりしものは、斯の如き意ありてなりしや否や、之を知る能はずと雖、而かも、斯の如き理ありとすれば、その沈黙も亦宜なりき。然れども、モーゼは斯く未來を説かず。靈魂不死を教へざりしと雖、靈魂の十全力を教へたれば、猶太教の信者は靈魂の不死を信せり。

モーゼは神來の人なり其の説けりし所素よりこゝに盡さず今之を精述するの違なきを以て筆をこゝに止むべし。

(四)ダビデ及ソロモン

猶太人がパレスチンに留まりし後大いなる變化ありたり。モーゼの時にありては、パレスチンは左して有力なる國民ならざりしが其の後に至りて俄にその勢力を得て一強國民となり、サミエル王、ソタル王の時を経て、ダビデの時に至り、最も強盛を極めたりき。然れども、ソロモンの時に至りて、漸く衰述に傾けり。此の間猶太教は頗ぶる盛なりき。殊にダビデは一種の天才にして、頗ぶる多藝、音樂、美術に通じ、又詩人なりき。就中音樂の如き神韻縹渺、神を降し、靈を呼ぶの妙ありきと傳へらる。其の唄へりし詩篇は神の讚美にして、實に猶太教の經典の一なり。神は万有の創造者にして、吾人に愛を垂るゝ所の慈父なりとの思想は、この詩篇の中にあり。此の詩篇は猶太教の最も高潮なりし時のものにして、基督教に至る間一步の點に至りしものなり。蓋し天の父、愛の神と云へる觀念を得來りたりければなり。

要するに、猶太教は基督教の前驅なり。その準備的宗教なりと稱せられたるものなり。

(五)その現勢

左しもダビデの時に盛なりし猶太教も、今日にては誠に勢力多からざるものとなれり。ハツセルの調査に據れば、全世界に於て之を信するもの四百万人、ジョンストンに據れば、五百万人、ベルキンに據れば、六百万人なりと云ふ。之を基督教徒の三億万以上、佛教徒の同じく三億万以上なるに比すれば、誠に微々たりと云ふべきなり。

第五章 「イスレーム」教

(一)アラビヤ人種

「イスレーム」教とは、マハメットの唱へたりし宗教にして、世の所謂マハメット教又は回々教なり。此の教アラビヤ人種の中に起りて、一時とは云へシリカ、ペルシヤ、北亞弗利加、イスパニヤを卷席して、遂に一大國を成し、歐洲の基督教徒を戰慄せしめたりし有力の宗教なりき。故にこの教の事を説かんとすれば、即ちアラビヤ人種の事を説か

ざるを得ず。  
アラビヤ人種は、バビロン、アツシリヤ、フェニシヤ、ペアリウ、カルサジニヤの人種と同じく、セミチツク人種にして、マハメットの時に至る迄、未だ國を成さず歴史を有せず、唯諸方に流寓し、又は一方に定住したる種族の群團たりしに過ぎず。其の中にて北方に存したる一種族は、此の人種の純粹のものにして、アブラハムの時よりマハメットの時に至るまで、更に變化する所なく、又その變化を希はずして永存したりし人民なりしと云ふ。

アラビヤ人種は斯の如く半開の人民なりしと雖、其の思想感情は偏固ならず、勇敢にして智あり、反省力あり知識を求むるに急なりし人種なりき。精神的事業を好み、團結的行為をなすの傾向をも有したりし人種なり。マハメット出づるまでは、この人種は多く世に知らるゝに至らず、蓋爾たる愚民の如くに思はれたりしと雖、而かもその中に存したりし所の精神は、亦他日機に會ふて發する時あらんとするものなりき。然れども、その宗教は誠に混亂したり、或は猶太教を信じたるものあり、或は基督教を信じたるものあり、拜物教あり、偶像を拜するあり、一神教と多神教と混同して、種族はその

方向に惑ふが如き有様なりき。而して、六世紀の終り、マハメットの未だ出でざりし時に當りては、偶像の崇拜最も一般に行はれたりき。  
斯の如き人種の中、斯の如き宗教の混亂の中に、マハメットは出でたり。而して、僅々數年にしてその信仰を一にし、その種族を一國民となし、忽ちはその勢力を大にして、以てシリヤ、ペルシヤ、北亞弗利加を征伏し、之を同一の信仰の下に立たしめ、實に宗教上のみならず、政治上に於ても、亦大いなる凱歌を奏しぬ。是蓋し自然に備へ得たりしマハメットの勢力に依りしならん。後代にナポレオンの雄略、人望、勢力は以て之に比すべきか。

(二)マハメット

然れども、マハメットは初より宗教家、又は武人として現はれたりし人にあらず。今その幼時の事を記すの違なし。二十五歳の時、寡婦カデイヂヤの財産管理者となり、其の商業上の事務を掌どり、パレスチン、シリヤ等に往來して、貿易業に従事し、誠實と熱心とを以て大ひに利を得たり。此等の旅行は、蓋しマハメットをして、猶太教、又は基督教の知識を得しめ、後日の大事を成さしむる所以なりしならん。後、幾何もなくして年長



なりし寡婦カデイヂヤと婚せり。爾來マハメツドは時にヒラの深山に入り、岩穴の内  
 に於て沈思冥想に耽りし事あり。之よりして神の全能と神に對する自己の責任とに  
 つきて、深く信する所あるに至り、其の冥想の結果、神經症に陥りぬ。然れども、その間天  
 使を夢み、神の己に豫言者たるの責任あることを告ぐるあるを知りぬ。マハメツドの  
 精神はこゝに於て、神聖なる傳道神の眞の道を傳ふべき天職の己に有ることを確信  
 して、決然として起てりき。而して、その信仰を自から呼びて、イスレームと命じ、ヘジラ  
 に於て布教を初めぬ。イスレームとは神の意に従ふとの意なり。その妻カデイヂヤは  
 第一の信者となれり。その從弟アリ、その朋友アビブビイクルも亦信者となれり。從  
 て之を信するものを増せりき。

此の時に當りて、同族の施政者たりしコレシナ、マハメツドの教徒を迫害し、種々の妨  
 害を試みたりと雖、而かも、マハメツドの説く所は、財産の權利を重んじ、婦人の位置を  
 高うせんと欲するにありしを以て、種族間の同情翕然として集まり、宗教の改革者と、  
 政黨の首領とを一身に兼ねるに至れり。勢力は日に加はり、信徒は月に倍し、近隣風を  
 望んで靡き、同族多くその權勢を仰ぐに至れり。乃ちマハメツドは宗教改革軍を起せ

り。メカを第一として遠近の異教徒を攻撃し、その偶像を毀ち、異信徒を誅し、コレシナ  
 を破り、猶太教徒を伐ち、遂にアラビヤ種族を統一して、イスレームの信仰を同族に流  
 布するに至りぬ。

勢力既に斯の如し、マハメツドの初志を尋ねれば、蓋し、イスレームの信仰をアラビヤ  
 種族の間に普及せんと思ひたりしに過ぎず。これはこれアラビヤ人種の豫言者なりと  
 したりしに過ぎざりしならん。雖、こゝに至りては、その宗教を世界の宗教たらしめ  
 んど欲せり。アラビヤ人種の豫言者は、忽ちにして世界の豫言者となれり。乃ち異教の  
 國を伐ちて、以て己の教權の下に立しめんと企て、シリヤ、ペルシヤ、北亞弗利加を征伐  
 して、遂にその教を普布せしめぬ。その死したるとき、即ち紀元六百三十二年には、既に  
 希臘を遠征せんとして、その準備をなしたりしと云ふ。

マハメツドの一生に關しては、批評すべき所頗ぶる多く、諸家の批評も亦多し。蓋し之  
 も亦モーゼ、基督等と同じく、神來の人なればなり。余はその説きし所の教理を述ぶる  
 の前に於て、少しくその批評を試みん。

(三)マハメツドの性行

正しき目的の爲に、正しき手段を用ゐるものは、いづくまでも正しかるべし。正しき目的は有しなからず、その手段正しからずは、いづくまでも正しく、又いづくまでも善なりとは云いかたかるべきなり。マハメツドの初てヘジラに教を説きしや、唯一の神の道を明にして、以て之を人に信せしめんと欲し、正當なる傳道をなしたりき。モーゼ、基督を以て、眞の神の道を教へたる先師なりとしたりき。唯一の神の意に従ひ、その創造を信し、その天道を信すべき事を教へたりき。當時偶像を信じ、凡物を崇拜したりし人民をして、その信仰の愚なる、その崇拜の理なきを知らしめたりし効に至りては、誠に多かりしと云ふべし。此の間に於けるマハメツドは、正しき目的の爲に正しき手段を執りたりき。

然れども、ヘジラの後のマハメツドは如何なりしか。宗教の祖師にして、而して政治家たり、將軍たるに至りぬ。ヘジラに於ては口と筆との傳道なりしもの、今は血と劍とを以てするに至れり。マハメツドがメジナに移れりし時よりは、辨舌と感情とを以てしたりし傳道を、武力を以てするに至れり。平和の中の説教は、戦陣の中の殺戮と變じたり。其の聖經とする所の「コーラン」は劍を以て普及せられ、血を以て分布せらるゝに至

れり。カーライルは、マハメツド教は劍を以て成効したるものなりや否やとの問題を解くに、抑もその劍は之をいづれに得たりしものなるやとの反問を以てしたりと雖、然れども、斯の如きは、果して正しき手段と云ふことを得べきか。勿論、宗教の祖師たるはどの人は、劍を執りて、以てその教を切り開くはどの熱心と勇氣となかるべからずと雖、亦柔和忍耐の美德、慈悲慈愛の高徳なかるべからず。眞誠の宗教は政治家の開く所にして、その人はその爲に辱を忍び、死を顧みざるの忍耐あるものならざるべからず。釋伽の如き、基督の如きこれなり。マハメツドを之に比せば如何。ゲーター之を評して、曰く、彼れ(マハメツド)の性質は次第に地上的となり、その天上の性質は又次第に退隠し、遂にその教理は目的よりも手段となり、實際的の手段は何事にも更に恐るゝ所なく、之を用ゐるに至れるなりと。然り、メジナ以後のマハメツドは正に斯の如し。教理を廣めんが爲の抗争は、變じて以て教理の普及を手段として、而して、反て征伐を目的とするが如く見ゆるに至れり。高き理想を實行せんが爲に、卑き手段を執り、遂に知らず識らず、その卑き手段を目的として、高き理想を手段とするに至れるなり。斯の如きは曾にマハメツドのみならず、ペーコン卿の如き、コロンウエルの如き亦然

り、惜しむべきにあらずや。  
之を要するに、マハメツドは世界に於ける大いなる人の一なり、深き信仰を有し、純粹の目的を有したる大人物なり。唯その執りし所の手段は、その目的に適はざる不正のものなり。宗教の祖師にてありながら、英雄の行ふ所を行ひ、正と善とを以て飽くまでも行はざるべからざるものが、不正と不善とをも行ふて顧みざりしものなりと云ふべし。

(四) 其の教理

マハメツド教は、前に既に説きたる如く、唯一の神を信するものなり。一方に於ては、アラビヤの多神教に反し、一方に於ては基督教の三位一體の教に反し、三位とは神、天子、精靈にして、この三位は一體となると説くものなり。て、絶対唯一の神のみを信するものなり。然れども、天使を無視せず、勢力の天使あり、之をガブリエル、ミイケルとす。死の天使あり、之をアズリエルとす。復活の天使あり、之をイスラヘルとす。又悪魔あり、エゾライスとす。

その經典「コーラン」は永生を教へ、天道を説き、マハメツドの前に豫言者ありしことを

説き、その豫言者はアダム、ノア、モーゼ、イエス、マハメツドはその相續者なりと説く。故に經典は皆に「コーラン」のみならず、「ペンテテウク」(モーゼの律法書、詩篇、舊約書、新約書)を歴舉し、死後の事、復活の事、終りの審判の事をも説けり。イスレーム教の信者にあらざるものは、死後永遠火中に葬らるべく、基督教徒、猶太教徒、偶像崇拜者その他異教の徒を俟つに、夫々異りたる地獄あり。イスレーム教の信者は之に反して、死後終りの審判を受け、天使ガブリエル、之を司る。乃ち一の天秤盤あり、一方の皿には善を盛り、一方の皿には惡を載す。惡量多ければ即ち惡の皿重きが故に、忽ちに地獄に落され、火中の苦しみを受くべく、善量多ければ善の皿重きが故に、その人は天國に登せらる。天國にては粧麗なる宮殿あり、花園あり、妙なる音楽を奏してその登り来る人を遇すとせり。而して、婦人も亦天國に登ることを得べしとす。然れども、その夫に先立て登ることを得べしとせず。又酒、賭博は之を惡事として禁せり。

「コーラン」には四海兄弟と云へる理想なし。これイスレーム教の信者は、その不信者を嫌ひ、之を征伐すべきものなりと定められたるに因るなり。されば、譬へば兄弟と雖、不信者ならんには、之を改宗せしむべく、若しイスレーム教の信者とならずんば、之を殺

毀すべきはこの教の信者たるものゝ義務なりとせり。

マハメッド教の宗派は頗る多し。概算に據れば七十三、その最も大いなる區別はサンニイ<sup>ニイ</sup>宗、シイト<sup>シイト</sup>宗の二なり。今ベルシヤは多く「サンニイ」なり。この二宗の間には、最も激烈殘忍なる争ひありたる事あり。

マハメッドの教理は概ね斯の如しとす。而して、その信者の熱心なることは、基督教徒に譲らず。祈禱の數多くして嚴肅なる、亦驚くべきものありと云ふ。今この教の信者の數を聞くに、ハスセルに依れば、世界の中に於てこの教を信するもの二億五千二百万、ジョンストンに據れば、一億一千万、ベルキンスに據れば、一億六千万なり。亦以て廣大なる宗教ならずとするを得んや。

(五)他の宗教との比較

神は宇宙に於て唯一の力あるものなり。人は全く受動のものなり。神は全く隨意專斷を以て、万物を造り、万物を支配するものなり。万物は神に對しては奴隸なり。神は世界を造りて悦びたりと雖、これ万物をその奴隸と感じたればなり。斯の如き思想は、マハメッド教の中央理想なりとは、バルグレープの斷定せし所なり。之を基督教に比す、人

は神の子、神は人の父なりと見る思想とは大いに異なれりと云はざるべからず。又之を破羅門教に比す、万物は「ブラマ」より出で、「ブラマ」に歸へると見る、凡神教的思想とも、亦大いに異なれりと云はざるべからず。

「コーラン」の説く所の天道なるものは、神の隨意專斷なり。されば、終りの審判に於て善惡秤測の天秤盤ありとは雖、而かも、神の好む所のものに天に行くを許し、嫌ふ所のものを地獄に落すなり。是好惡の教なり。之を基督教の愛の神に比す、敵だも之を愛すべしとなすものに比すれば、大いに異なれりと云はざるべからず。又之を其の教ひの教に比すれば、基督教の神は人を救はんとするものなるに、マハメッド教の神は、好惡を以て或る人を苦めんとするものなり。亦甚だ異なれりと云はざるべからず。

マハメッドは多妻主義にして、已は十一人の妻を迎へたりと雖、その信徒には四人より以上の妻を有することを許さざりき。之を佛教の僧侶に妻帯を禁じて、基督教の夫一妻主義なるに比すれば、大いなる相違あり。

「イスレーム」教は劍と血とを以て普及せられたるものなり。「コーラン」なる經典は、獨立して歩まずして、劍と血とに従ひて歩みたるものなり。之を慈悲を説き、殺生を禁ずる

佛教に比せば如何、又之を敵を愛せよと説く基督教に比せば如何、その相異なる甚だしきものあるなり。然れども、世界は善の爲に惡に對ひて戦はざるべからざる所のものなりと見る、スカンヂナヴィヤ、ベルシヤの宗教に比せば如何、互に一致する所あるにあらずや、然れども、惡を亡ぼさんが爲の善の奮闘は、これ基督教にも、佛教にも、波羅門教にも、備はれる精神なり。マハメッド教のこの點に於ける失は、之を殘忍に使用せしにあり、寛容の精神なかりしにあり、正當の目的を不正の手段に依りて達したるにあるなり。

### 第六章 基督教

#### (一) 基督教の創立者

基督教の創立者と云へば、佛教の始祖の釋迦なるが如く、イエス即ち耶蘇なる事は、皆人の知る所なり。

イエス、何故に世に出で、基督教を立てたりしか、其の信仰者の信する所に従へば、其の神此の世を救はんが爲に、その子を下せしなり。イエス、乃ちこの世界の人の罪を救

はんが爲に降誕せしなり。

信仰者の信する所の如何に拘はらず、イエスのこの世に出で、驟然立ちて教を垂れし時は、即ち正に新宗教新信仰を要求せし時なり。之より先既に猶太教あり、唯一の神を信せり、人民皆一神の存在を知らざりしにあらず。然れども、猶太教は第四章に説きしが如く、モーゼの律法書を經典となせしものなり。國約的にして、又外形的儀式、典禮を重せしものなり。モーゼの性質を受けて、博愛の義に乏しく、殘酷を免れざりしものなり。故にイエスの出づる時に及びてや、猶太教は精神なき虚儀のものとなり、儀式、典禮にのみ重きを置きて、精神上の信仰、倫理、道徳は全く腐敗したり。當時羅馬の勢力盛にして、其の國家的組織最も高度に達し、其の人民の特質なる法治的氣風も、亦その屬地に普及せり。故に人々一として精神を問ふものなく、外形にのみ走せ、唯一の神の教なりとして誇る所の猶太教は、唯これ儀式、清洗、犠牲、斷食、祈禱、施濟の宗教となり、羅馬の古教第三章に説きたる多神教、その他の宗教も亦盛にして、偶像の崇拜、多神の信仰、幾んど一般に行はれ、猶太教すらも其の教理に背きて偶像を造り、之を崇拜するに至れり。當に之のみならず、その僧侶の腐敗甚だしく、肉感の快樂にのみ耽りて、精神の

安慰、平和を得んとするが如きは、望外の事となれり、之を要するに宗教は腐敗したりしなり。精神上に於て廢頹は傾けりしなり。斯の如き時に當りて、誠に宗教の眞義と信仰の眞髓とを保たんことを欲し、民をして眞の道、眞の宗教を知らしめ、信せしめんと欲するものあらんか、イエスその人ならざるも、苟も宗教的熱誠あるものならんには、必ず慨然として立つべかりしなり。況んや、イエスの如き世界に稀有なる大人に於てをや。

(一) イエス基督

イエスの父をヨセフと云ひ、母をマリアと云ふ。パレスチンの一小邦、ガリラヤの一小邑、ナザレに生る。イエスの生地をベツレヘムとなすは、誤れり。斯くなすは、舊約預言者の書に、イエスの救世主たることを強ひて辨證せんが爲の言なり。基督教の信者は、イエスの母マリア、處女なりし時、一夜聖靈、即ち神の靈なりを夢みて姙み、以てイエスを生めりとある聖書の言を信せり。イエス三十歳にして慨然立ちて、其の教を弘む。その説く所、猶太教、又はその他の宗教と異にして、斬新、確實、信溢ふれ、義盈てりしかば、之を聞くもの、驚き服せざるはなし。門弟等は皆所爲く、是會てモーゼの預言、即ちイスラエ

ル人の同胞中に、已の如き一の預言者を立たしむべしと云へりしものに違はず、即ちイエスこそ、その預言者なる救世主にして、猶太の國力を挽回し、國民を興復する人なれど、然れども、スピントルを始め、その他の基督教學者の云ふ所に據れば、此の門弟等の思へりし所は誤謬なり。イエスは救世主と云へる語を濫用したりと雖、その救世なるものは、此の門弟等の思へりしが如く、政治的、外形的に、單に猶太國民のみを救はんと云ふにあらず、イエスの所謂神國とは、全く道徳的、宗教的に解すべきものにして、又單に一國民の占有すべきものにあざればなりとせり。

イエスを基督と云ふは後に贈られたる榮名にして、その義は受膏者と云ふ事なり。イエスの傳に就ては著書頗ぶる多く、之を神の子なりと見て渴仰ねかざるものあり。又之を人の傑れたるもの、みとして、神聖的品性をなみせんとするものあり。此の小冊子の能く之を述ぶることを得る限りならねば、余は之を他書に譲るべし。

然れども、イエスの品性の尋常一様の宗教主唱者にあらずして、世界の宗教の開祖中、三人と得べからざるものなることは、余の堅く信じて疑はざる所なり。降誕と云ひ、復活と云ひ、奇蹟と云ひ、吾人の見て以て奇怪に感ずる事あるにも拘はらず、其の躬行實

踐に厚くして、愛神、愛人の精神充溢し、身を以て万人救済の犠牲となりて、十字架上に死したるに至りては、釋迦の慈徳、忍徳、衆生濟度の本願の大なるに比して、軒輊するなきを見るなり。況んや、その降誕、復活、奇蹟の如き、解釋の如何に依りて、吾人の信仰を引くものたるに於てをや。余は基督教の信者にあらずと雖、而かも、耶蘇基督一代、愛の事業に至りては、深く之を嘆稱せざることを得ざるものなり。

### (三)基督教の教理

基督教の教理は、佛教の教理と同しく、今や多くの書あり、多くの説者ありて之を傳ふ。故に其の大體の意は、恐らくは、能く人の知れる所ならん。然れども、その高等批評の如き、精細の説述の如きに至りては、尙未だしと云はざるを得ざるものあり。故に之を知らざるもの多からん。然れども、此の後者の業は本書の如き小冊子の任ならず。前者は既に人の知る所なりとせば、本項は頗る困難なる業なり。余はこの困難なる記叙をなすに際して、一の便法を用ひ、先、基督教の教理の最要至極の一句を揚げん。

「汝神を愛すべし、汝の隣人(天下萬人)を愛すること、汝自己の如くすべし」(馬太傳廿二章三十七及四十)と云ふものこれなり。之に次ぐものを、馬太傳五、六、七の章に載せたる

山上の垂訓とす。此の垂訓は、基督教の教理を最も能く燦然たらしめたるものなり。又之に次ぐものを、同傳十三章、十八章、廿章、廿一章、廿五章、馬可傳四章、路加傳五章、十章、十三章、十四章、十六章等なりとす。要するに、其の教理の大要を云へば、神は人の父にして、天下の萬人は神の子なり。萬人は皆相互に兄弟姉妹なるが故に、世界の人類は是即ち一大家族に同じ。抑も神は無量の慈愛心を以て、萬人の父となれるものなれば、人類も亦相互に一大家族の兄弟姉妹の如く、各自私慾、我意を捨て、以て豁然として和氣緩鬪たる間に交際し、親睦友愛の中に生活し、敵と雖、亦之を愛せざるべからず。此の地上はいづくの處たりとも、斯の如き状態の現はれたらん所には、即ち天國神の國在るなり。基督の來りたるは、神の國(天國)を地上に榮えしめんが爲なり。固より天國の實に在る所は、甚だ稀なりと雖、然れども、基督教徒の冀望し、又は理想とする所は、天國を全地に普及せしむるにありとす。

イエスの教へし所の大要斯の如し、神と人との關係を以て、子と父との關係の如しとせり。故に之を神子宗教とも云ふ。其の人の倫理を教ふるや、人は常に言語と行爲とのみを以て罪を犯すにあらず。其の思考せる所惡ければ、即ち亦罪を犯せるなり。故に罪

悪を絶たんと欲せば、即ちその根本に遡りて之を絶ざるべからず。根本は即ち思考なり。先、思考の悪を亡ぼすべしと云へり。又その信仰を教ふるや、人間の最大幸福は、神と交通するにあり。子の父に於けるが如く、人間と神と相共にするの生活にあり。是信仰の神髓なりと云へり。又その贖罪の事を教ふるや、萬人は悉く罪あるものにして、怡も放蕩息子の如きものなり。故にその罪を悔悟し、信念を厚うして、神の和に入るべし。神は慈愛深きものなれば、悔悛の心ある人を容れて、之が罪を免すこと、放蕩息子の父に於けるが如しと云へり。故にイエスは悔悛の心ある人は、神その罪を赦免すとなしたるものなり。後ちに、羅馬「カソリック」教に、法王の贖罪免狀ある所以のもの之に因るなり。

基督教の教理は固より廣大なり。こゝに盡きずと雖、その大精神のある所は、略々以上の如しとす。之を猶太教「マハメッド」教の教理に比すれば、愛と四海同胞との教理に於て一層の發達進歩なりと云はざるべからず。蓋し此の二教にありても、仁愛を説かざるにわらず。然れども、其の仁愛は同國民、同教徒間の事のみ。汝の隣人(天下万人)を愛すること、汝自己の如くなるべしとの思想あることなきなり。敵を愛せよとの基督教の教

理は、此の博愛主義より出でたるものにして、全世界の人類を同胞と見るの思想も、亦然り。斯の如き思想はこの二教の有せざりし所。唯孔子と釋迦とに於て、之に同じき思想即ち衆生濟度、四海兄弟の思想あるを見るのみ。

(四)基督教の神

猶太教も「マハメッド」教も、一神教なり。天地に唯一の神ありて、完全、無缺、全知、全能なり。としたるものなり。基督教亦之に同じと雖、然れども、その性質を説く、頗る高尙なり。曰く、神は靈なり。形あるにわらず。其の性は眞善美を具足して、全智、全能、完全、無缺、永遠、不變、無限、無量、獨一、不二、又他に神なるものあるにわらざるなり。故に宇宙の創造者、準備主にして、生活するものなり。こゝを以て、人の罪惡を憤ばり、善良を嘉みし、又之を救ふものなり。之を前二教の神に比すれば、同じ「エホバ」なれども、その性質、高遠、偉大となれり。

然れども、神、即ち絶對無限の存在物は、吾人の知識の及ぶべからざる超越界に在るものなり。然るに、その性質を斯の如くに明言す。即ち知るべからざる超越物を知れりとなすものならざるを得ず。是少なくとも撞着なり。余は基督教が餘りに神の性質を明



言せずして、之を不可知、不可思議の超越界に置くを以て、却て高尙なりとなさん。然れども、一神教は宗教思想の最も進歩したるものなり。殊に其の唯一の神を以て、猶太教「マハメット」教に云ふが如く、嚴酷端正なるもののみと見ずして、博愛、仁慈なるものと見たる基督教は宗教としては、最も進歩したる思想を有したるものなり。エホバは初唯、アブラハムが一家の神なりき。モーゼ之を猶太國民の神となしき。イエスに至りて之を世界の人の神となしぬ。後マハメッドは之を劔と血とを以て征伐したる數國民の神となし、その性質を狹隘ならしめたりと雖、而かも、基督の新舊二教の運動は、再ひ之を世界の人の神たる廣大の性質に復せしむるに至れり。神の性質の其の信者の説明に依りて、變遷進歩したる、又頗ぶる妙ならずや。

(五)三位一體

三位一體の教理は、マハメッドの反對せし所なり。又自由の討究を許せる基督新教の中には、之を信仰せざるものもありと雖、而かも、基督教の一の精神なり。三位とは前(第五章四)に説けるが如く、神、聖靈、天子の三者これなり。神とは前項に説ける唯一、不二、完全、絶對の神「エホバ」を云ふなり。聖靈とは此の神の靈

にして、形なく、體なしと雖、叙智、全能にして時に人に現はるゝ所のもの、即ち神聖なる精神なり。天子とは即ちイエスにして、神と人間との間に在りて、人間に神を信せしめ、神の救世を人に與ふる所以の存在なり。此の存在は神の子にして、神の救世を人に與へんが爲に、人となりて世に出でたるものなれば、即ちそれ自身神なり。故にこの三位に分れ立つと雖、然れども、一なり。人類は此の三位の教に依りて、己の罪惡を救はれ、天國を地上に有したることを得、幸福ある生命を全うすることを得るものなり。就中聖靈の如き、人類の神を愛し、神を信すること濃厚なるに於て、之を見之に接し、救済を得べしとなり。

ヅント等の説けるが如く、天子、天使、聖者等の存在を信するは、唯一の神の外に、又之より出でたる神聖なる存在物あることを許すものなれば、名は一神教なりと雖、その實は多神教的思想なり。多くの神を崇むると雖、その神等の上に、唯一の主神あるを信するは、多くの神を以て唯一の神の從屬物とするものなれば、名は多神教なりと雖、其實は一神教的思想なり。故に一神教も多神教にして、多神教も一神教なりとせば、此の三位一體の教理は、少なくとも、多神的思想なりと云はざるべからず。蓋し唯一の神よ

り分出したる神聖なる存在、精神ありとするの思想を排することを得ざればなり。

(六) 基督教の變遷、發達

基督教の猶太國に起りたりしや、其の境遇甚困難にして、教主イエスの如き、遂に十字架上に殘殺せらるゝに至り、信徒亦一日も安きを得ざるものありき。然れども、其の信仰益々堅く、四方に布教して、熱心誠意、イエスの教を擴めたり。其の羅馬に入るに及びてや、前(第三章十四)にも云へりしが如く、迫害を被ふること少なからず、信者の殘殺粉砕せらるゝもの、頗る多かりしと雖、元、この迫害たるや、羅馬法治的精神に依るもの多く、外形的にして、國法に戻り、政治に反するの宗教なりとしたるに由るものなれば、内心の自由は少しく之なかりしにあらす。況んや基督教の羅馬に入れりし時は、其の古教の個人主義と哲學思想との爲に、知識ある人の間に信用を失したる時なりしかば、斯の如き迫害を被りたりしにも拘はらず、頗る長足の進歩をなしたり。惟ふにシセロの如きありて、羅馬古教の愚を笑ひ、セネカの如きありて、凡神の哲學を唱へ、既に羅馬の人心に一神の教理を注入したりしを以て、基督教の一神的教理、頗る人心に投じ易かりけるが故ならん。

斯くて三百年、已に羅馬の人民の大多數は、基督教の信者となりぬ。乃ちコンスタンチン帝は基督教を國教と定めたりき。然れども、羅馬國民の特質は法治的、組織的、中央集權的、形式的なり、その古教、即ちこの精神を以て成り、その國家全くこの精神を以て立てりき。基督教は元來自由主義、個人主義のものなりと雖、斯かる精神の充てる羅馬に入りては、乃ち又之と同化せざるを得ず、こゝに於て乎、基督教は法治的、組織的、形式的、中央集權的に變じたり、宗教者に官階を設け、(即ち執事、長老、監督、大監督、大僧正、法王、) 内心の信仰、虔敬を以て、神の和に入るべき宗教は、變じて外形の服従、崇拜を以て、天國に登り得べしとなすに至りぬ。されば、法王は神の代官にして、その權力無上、人の罪を赦免し、天國に登るの特許を與ふることを得るものとなり、總ての教會、總ての信者を支配して專斷至らざる所なく、加ふるに、羅馬古教及猶太教の偶像崇拜を輸入し、僧侶の品行、道德、亦頗る腐敗するに至れり。此の專權を憤りて、第一に分離したるものは、アルメニア宗、并に希臘カソリック宗なりとす。又下りてその專權と、腐敗と、形式的、法治的、壓制とに憤りて、別に自由的精神的の基督教を起したるものを、プロテスタント教なりとす。即ち基督教新教是なり。此の新教に對して、法王教治の基督教を羅馬宗、又

は羅馬「カソリック」教と云ひ、アルメニヤ宗、希臘「カソリック」宗を併せて基督舊教と云ふなり。抑も此の新教の發生たるや、前第三章十八に云へりしが如く、實に歐洲北部人種の特性并に宗教の勢力、即ち自由精神、獨立人格の思想、要するに個人主義、自由主義の精神に出でたるものなり。ルーテル、ツィンクリーは實に此等の精神を以て、基督教を刷新せんとして、獨逸に、端西に、歐然として起りしなり。此の新運動は、基督教に生氣を生せしめたるものにして、愈々之に世界的の性質を附したるものなり。故に此の新運動を別言にて論ずれば、個人的、自由的、精神的、獨立的宗教思想と、法治的國家的組織的、形式的宗教思想との戰鬪なり、分離なりと云ふべし。こゝを以て、新教の大要實とする所のものは、曰く自由、曰く精神、これなり。自由は法王教治の壓制に反したるなり。精神はその外形的、外飾的儀式に反したるなり。而して、經典信條に自由の解釋を許し、信仰讚美に精神的熱誠を以てすべきことを命ず。是に於て乎、新教の信者は各自由の運動に出づ。乃ち多くの信派を生ずるに至れり。

(七) 基督教の宗派

基督教の全體を詳論するは、この書の能くすべき所にあらざるを知るが故に、こゝに

基督教の宗派を歴舉して、この章を終らん、即ち之を大別すれば二なり。

基督教 { 舊教「カソリック」教 }  
          { 新教「プロテスタント」教 }

少しく之を細別すれば、舊教に於て三宗派、即ち

(一) アルメニヤ宗

舊教 (二) 希臘宗、希臘、露西亞等に行はる

(三) 羅馬宗「カソリック」宗

新教に於て凡そ十有六、即ち、

(一) ルーテル宗

(二) カルヴァイン宗

(三) 監督教會「エписコパル」宗、即ち英國教

(四) 長老教會「プレズビテリアン」宗、即ち蘇國教

(五) 改革教會(和蘭に行はる)

(六) メソヂスグ宗會(即ち美以美教會)

新教

- (七) 組合教會
- (八) 「バプチスト」會
- (九) 「クエーカー」宗 同朋宗會
- (十) 「モラビアン」宗
- (十一) 「イルビンヂスト」宗
- (十二) 「スウ\*デンホルク」宗
- (十三) 「モルモン」宗
- (十四) 「ユニテリアン」宗
- (十五) 「ユニバーサリスト」宗 宇宙神教
- (十六) 「ラシヨナリスト」宗 自由神教

此の他その派を數へ來らば、三百餘派にも及はん。今之を擧ぐるの逸なしとす。

第七章 ペルシヤ火教

(一)「ゼンド、アヘスター」の知識

ペルシヤ南西の地方に、シラツと云へる地あり、其の古は「アーシスタン」郡の一部なりと云ふ。此の地に「クセルセックス」王城の古蹟、青草翠樹の間に存せり。固より破壊破柱、昔日の王宮の如何に壯麗美觀なりしかを窺ふに由なしと雖、而かも、殘存の鍊瓦石、未朽の大理石に據りて之を察すれば、ペルシヤ王國の昔時、兵を印度に出し、又小亞細亞を犯し、諸邦の使節を此の宮殿に引見して、其の盛に誇りたりしを想像に描くに難からざるなり。

此の古蹟に刻像の殘れるものあり、之に添へる碑銘亦存す。その文字、奇異變怪にして讀むべからず。近時學術の開進に依りて、漸くに之を讀むことを得たり。曰く、世界の統御者の相續者たる「ハイスタスベス」の子、諸王の王、ダライアス、曰く、世界の統御者の子孫なる「ダライアス」王の子、諸王の王、クセルセックス、又他の所に銘したるものに曰く、「オルムツ」は全能の神なり、世界を造り、天を造り、又人を造り、而して、人に光榮を與へ、クセルセックスをして萬人の統治者たる王たらしむ。ダライアスの子たる我、クセルセックスは、「アキメーニイド」に於て、世界の王、諸王の王たり。又他の銘に曰く、「アダクセルセックス」王は、茲に宣言す、此の大工事は、朕の成す所なり。「オルムツ」神、「ミトラ」神は、朕並に朕の宮

殿及朕の人民を保護す。此の古蹟のダライアス王を初、その相續者の宮殿なりし事以て知るべきなり。而して、之と同時に、ベルシヤ火教の天地創造説、並にその神の名の如何なるものなりしやを窺ふに足れり。

抑もベルシヤ火教は、之を「ツラスタニズム」即ち「ツラスタ」教、又「バーシーズム」と云ふ。昔時ベルシヤの強大なりし時の國教にして、ベルシヤ人一般の信せし所なり。即ち「オルムツ」神を信す。其の經典を「ゼント、アベスター」と云ひ、其の開祖を「ツラスタ」と云ふなり。「ゼンド、アベスター」とは「ゼント」語を以て記したる「アベスター」知識と云ふ意なり。吾人が「ゼンド、アベスター」の如何なる事を記したるものなるかを知るに至れるは、近代の事なり。固より「ツラスタ」の事は希臘人の間にも疾くに知られざるにあらず。プラトンの如き、ベルシヤ王子教育の事に就き、その「ツラスタ」に教育せられたることを記したりき。されば、吾人は疾くより「アベスター」の名を聞かざりしにあらず。然れども、親しくその書の譯文に接したるは、佛人「アシクエテール、ヂュベロン」の方にあり。即ちその出版は千七百七十七年の事なり。此の翻譯につきては、二三の批難なきにあらず。

りしかども、而かも、欧州人に「ベルシヤ火教」の思想を得せしめ、又遂に吾人にも此の知識を得せしめたるは、ヂュベロンなりと云はざるべからず。

(二) ツラスタの時代

此の「ヂュベロン」の譯したる「ゼンド、アベスター」は、「ツラスタ」の作る所なりと云ふ。故に「ベルシヤ火教」の開祖は「ツラスタ」なり。然れども、此の「ツラスタ」は如何なる時代に存在したる人なりしか。今日傳ふる所の説區々にして、幾んど一定を缺けり。或は紀元前六千年の古なりと云ひ、或は二千年前「アブラハム」の時を同うせりと云ひ、或は千三百年前と云ひ、或は三百年前、或は六七百年前と云ふ。而して「ツラスタ」と「アブラハム」を會見したりし事ありと云ふ奇説あり。又「プラト」は「ツラスタ」を以て、「オルムツ」神の魔法宗徒なりと云へり。近時に至りては、又「ツラスタ」は一人にあらずして、數人同名の宗教者なり。「アベスター」は即ち是等數人の「ツラスタ」が作りたる所のものなりと論ずるものあり。ダ「アメステター」の如きその一人なり。然れども、之を一人にして實存せし人なりと見るの説多數なるが如し。

其の實存せし人なりと云ふ説にては、バクテリアに生存したりし人にして「アベス

ター」を作れりしも亦同所に於てなりきと云ふ然れどもその傳記に至りては今日に傳ふるもの頗る少なく幾んど全くその如何なる事をなせし人なりしかをも知ることを得ず唯その教理の「ゼンド、アベスター」に據りて吾人に傳へらるゝのみ。

(三) ヱラスタ教の精神

「ゼンド、アベスター」に據りて窺へば、ヱラスタは他の宗教の開祖と同じく天才の人なり其の教へたる宗教は、佛教と同じく道德的宗教なり然れども其の教へし所は全く相反せり宗教は凡神教的なるを免れずと雖、ヱラスタ教は然らず個在神教にして二元論あり之を一元論と見たる學者あれども恐らくは誤謬ならん善惡の區別を以て根本よりあるものなりとし善行の高きは眞義善を全うするにありと説けり佛教の善惡無差別を説き慈悲慈愛を主とするとは正に相反せり故に佛教は慈悲を本願とし、ヱラスタ教は正義を本旨とす又ヱラスタ教は天命を説き、佛教は智慧を説き前者は創造開闢を説けども後者は之を説かずして因果を説き、天地萬物を以て唯心所變とす故に同じ道德的宗教なりと雖、一は善惡二者共に根本より區別ありとし、一は之を唯心の妄念とすこゝを以て一は創造ありとし、一は萬物は唯幻影なりと

見るなり、ヱラスタ教は善の飽迄も惡に對して戰闘せざるべからざるを教へ、佛教は一心の悟覺に依りて善惡無差別、本來空に歸すと教ふるなり此の兩教共に人生道徳の改良を以て任したるものにして斯くその見る所教ふる所を異にす亦奇ならずや而かも兩教共に人格的精靈に原因する道德即ち人生的道義の觀念を缺くに至りては一なり基督教の學者は此の故を以て、ベルシヤ火教の道德を低しとせり佛教の道德を高からすとすなり。

ヱラスタ教の精神は略かくの如し故に此の數にありては善惡二途の存在は、實に此の世界の現象に於てのみならず遂にその根本なる精神界に於ても亦根本的に區別せられたるものなり神に外形的なる惡に向ひて戰闘せざるのみならず精神的なる惡に向ひても亦戰闘せざるべからざるなり善の根本は神聖なる精神界にあり惡の根本も亦惡虛なる精神界にあり吾人は神に惡人と闘はざるべからざるのみならず此の惡虛の精神と闘はざるべからざるなり善と光とを全うせんか爲に惡と暗とに向ひて戰はざるべからず善神の爲に惡神と戰はざるべからず吾人は吾人の心意の内に於ても亦その惡しき精神を亡はさんが爲に善き精神の奮闘を要するものな

もとす。

(四)ペルシヤ火教の神

ヅラスター教は二元論なり故にその神も亦二元的なり。一をオルムツツ神とす。善と光との神にして、天地の始の神なり。一をアリーマン神とす。悪と暗との神にして、天地の始よりオルムツツ神と共に存し、永都オルムツツの反對に立つ敵なり。又「ミトラ」と云ふ神あり。保存、怯復、再生を掌とる神にして、オルムツツの助神なり。埃及の「オリシニス」ハタ「イホン」「ホーラス」波羅門教の「ブラマ」シヴァ「ヴィシヌ」等、皆之に似たりと云ふべし。

學者或はペルシヤ教を以て一元論なりとし、畢竟この「オルムツツ」アリーマンの二者も一の絶對存在物の造れる所なりと説くを以て、此の教の精神なりとなすものあり。然れども、根本的に善惡の區別ありとし、常に富象界のみならず、その根源なる神靈界にも、亦善惡の兩源存すとすは「ヅラスター」教の中央思想なり。且つや此の一の絶對存在物の思想は「アベスター」の最古のものに見出す能はずして、最後のものに含めるものなれば、即ち「ヅラスター」教を一言論と見んば、不當の見解なるべし。

是等の神は此の教の信者の信仰、崇拜する所なり。而して、又信者は別に火を拜せり、星を拜せり、殊に太陽を崇拜せり。是拜物教に似たりと雖、その精神のある所は違へり。太陽、星、火を以て「オルムツツ」の表章と見るか故に崇拜するなり。光明赫々たる「オルムツツ」の代表者を見るが故に崇拜するなり。こゝを以て火教の名ありとす。

(五)その現勢

ペルシヤ火教はアレキサンドル大帝のペルシヤ征伐に依りて一旦壓伏せられ、後「アルデシユル」ババザンの再興する所となりしかども、又「マハメッド」教徒に壓伏せられ、其の少數の信者、僅に身を遁かれて印度に入り、辛うして生息を保ちたり。さればその生地には於ては全く亡び、印度に於て僅に餘喘を保つに過ぎず。千八百八十一年の調査に據れば、その數僅々八萬五千三百九十七人なり。又その氣風も頗る印度化して、純粹の教理を奉つるものは頗る少數となれり。然れども、同信徒間の和合一致ある、一夫一妻主義を守れる等の特色なきにあらず。殊に十八世紀に至りては、此の教を振起せんとする新運動起り、大に面目を改めしものなりと云ふ。

(六)波羅門教との關係

波羅門教の經典韋陀と「アベスター」とは大ひなる關係を有せり。蓋しベルシヤ人も印度人も同じく「アリヤン」人種なり。アリヤン人種の最始の宗教は一は韋陀、一は「アベスター」の二方面に向ひて發表したりしものなり。その神等に同じ名のもの、存する。譬へは「イントラ」<sup>ニシユラー</sup>「シヴァ」の舊名「ナアヘイチア」の如き、二教共に一神教的傾向ありて、而かも、凡神教たり、多神教たる等、頗る一致類似する所あればなり。又同じ「アリヤン」人種なる「スカンチナビヤ」人の宗教と、<sup>ヤ</sup>「ラスタ」教と能く似たる所あり。善惡光暗二神の戰鬥の思想の如き、その一なりとす。韋陀「アベスター」の一致の點に就て、尙少しく之を説かんに、「インドラ」<sup>ニシユラー</sup>「ナアヘイチア」等は、韋陀に於ては神にして、「アベスター」にては惡鬼なり。その人種の根源の地を「アベスター」にては「アリアナアベエ」ヨ」なりと記し、韋陀にては、之を「アリアベスター」と記し、「アベスター」にては、韋陀にては、「ミドラ」を大陽の神となせり。「アベスター」にては、「イマ」を幸福の神とし、韋陀にては、之を「ヤマ」と云ひ、冥府の法官とせり。此の神佛教に移りて、閻摩と稱せられ、又冥府の官たり。而して、此の二教共に火を神聖なるものとし、「シンド」語にて「ホマ」梵語にて「ソマ」即ち蘇摩樹の液を澱ひて、崇拜の禮を執ること同一なるのみならず、此の蘇摩樹を

讚美するも亦一なり。健康を増し、勢力、心力を強くし、戰に勝たしめ、小兒を美ならしむるものは、實にこの蘇摩樹液なりとするも亦一なり。是等の類似點を挙げ來れば、「アベスター」と韋陀との間に密なる關係あり、その源の一なりしを知るに足らん。即ち「アリヤン」人種最始の宗教は「アベスター」と韋陀との二方面に分れて現はれたりしことを知るに足るなり。

### 第八章 波羅門教

#### (一) 印度人種

其の源を、裏海の東に發せる「アリヤン」人種は、一方は歐羅巴に、一方は「ベルシヤ」を経て、印度に移れし事は、動すべからざる事實なり。故に印度人種の「アリヤン」なる事は、又多言を要せざる所なりと雖、而かも、悉皆の印度人が悉皆此の移住の「アリヤン」なりしや否や、是の一の疑問なり。印度人の四種の階級を設け、堅く之を守れる事は、苟も史を讀めるもの、能く知る所なり。其の階級制に曰く、



- (一)波羅門種族(祭祀學藝の人にして僧族)
- (二)刹帝利種族(政治軍務の人にして士族)
- (三)吠舍種族(耕作種藝の人にして農族)
- (四)戍陀羅種族(使役賤業の人にして奴婢族)

これなり、惟ふに此の戍陀羅種族は印度土着の種族にして、前の三種族は即ち移住者たる「アリヤン」なり、即ち「アリヤン」が「ベルシヤ」を経て印度に侵入し來るに當り、其の土着の種想を征伏し、之をして使役賤業の人たらしめ、之を呼ひて戍陀羅と云ひ、遂に此の最下の種族を成立せしめたりしならん、されば前の三種族は白哲種にして、戍陀羅は黒人種なりしならん、蓋し階級制は「ヂェトン」族にもありし所のものなれば、「ヂェトン」族と其の種族を同する「アリヤン」種か、印度にこの制を携へ行きたりしは、毫も怪しむに足らざる所なり。

印度人種の起源既に斯の如くなりとすれば、其の人種は常に純粹の「アリヤン」種のみならず、土着の黒人種も最下の種族とせらるゝとは雖、亦之ありしなり、固より征伏者たる「アリヤン」種は其の威權を以て、隨意に自己の宗教を立て得たりしならん、と雖、亦

土着種族の信仰の残りしものもなきにあらざるべし。

(二)波羅門教の經典

種族の階級既に斯の如くなれば、其の種族各自の職分を守るも、亦嚴重なり、即ち宗教は一切波羅門種族が世襲に管理する所にして、此の種族あるにあらざれば、人は神に接すること能はずと定めたり、從て、波羅門種族は生れながらにして神聖なり、生れながらにして、神と人との間の交通に任すべきものなりとせり。

斯の如く、波羅門種族は生れながらにして神聖なる僧族なり、宗教は一切その掌とる所なり、而して、その經典とする所のものは何ぞやと問ふに、韋陀これなり、韋陀經典は大體に於て二類に分かる、一を「スルータ」都致と云ひ、天啓に出でたるものとす、所の經典、一を「スムルチ」思惟所修と云ひ、傳説、又は議論、註釋の蒐集に成る所の經典、これなり、而して「スルータ」は之を分ちて三とす、即ち

- (一)「マントラ」即ち讚美歌
- (二)「ブラマナ」即ち儀式
- (三)「ウパニシヤッド」即ち哲學

是なり、スムルチスムルチは之を分ちて四とす即ち

- (一)ウエダングスウエダングス即ち讚美歌、儀式、韋陀の註解等
- (二)スマルタ、スートラスートラ即ち家庭、寺院の法
- (三)ダルマ、サーストラサーストラ即ち律令殊に麻奴法典
- (四)ブアクチブアクチ、サーストラサーストラ即ち古傳の詩

是なり。是等の韋陀經典は左の四種の名を有せり。

- (一)梨俱韋陀梨俱即ち讚美歌にして千十七篇あり。
- (二)蘇摩韋陀蘇摩即ち蘇摩樹を搾りて、因陀羅神に献くる式を説く。
- (三)治受韋陀治受犧牲を捧ぐる法を説く。
- (四)阿闍婆韋陀阿闍婆呪詛、攘災の事を説く。

此の中にて梨俱韋陀最も古し。要するに韋陀經典は紀元前千二百年より二百年迄或は云ふ紀元前二千年より千年迄の間に漸次作られたるものにして、多くは詩的の讚美歌なりとす。

(三)波羅門教の神

波羅門教の神の最も古きもの(梨俱韋陀に於て讚美する所のもの)は、因陀羅ミトラ、「ヴァルナア」ヴァルナア、「アグニイ」等なり、然れども、是等の神は一神にして多現なるものなりと説ける所あり、梨俱中の或る讚美歌の如き、是等の四神を呼びて一にして多々にして一なるものなりと唄へり、蓋し因陀羅は大空氣の神にして、「アグニイ」は宇宙の統御者なり、而して此の二者一なりとすれば、即ち宇宙は一神の統御する所のものなり、波羅門教の一神教的思想ある、以て知ることを得べし。

然れども、是等の神の信仰も時と共に變遷して、「ブラマ」梵天、「シヴァ」ヴィシヌを信仰するに至れり、「ブラマ」は天地創造の神にして、「シヴァ」は破壊の神、「ヴィシヌ」は萬物の保存恢復の神なり、是等の神を信するに至りて、波羅門教は三位説を執るに至れるなり、勿論是等の神の信仰は最始の韋陀にはあらずして、「ウパニシャッド」後の事なりと雖、埃及の「オリシニス」タイホン、「ホーラス」ベルシヤの「オムルツ」アリーマン、「ミトラ」ミトラと同じく、宇宙の生々、破壊、再生の三力を代表したる三位の神を信するものなり、是等の三神を信仰せしむるに至れりしは、波羅門種族か印度人民の信仰を統一せんか爲めの、功夫に出でたりしと論なしと雖、而かも、宇宙の生々、破壊、再生の三力は三

位の不可思議なり。此の不可思議に思ひ至れば、純然たる抽象的一神論に満足することを得ざるに至るべし。蓋し一神の創造に反したる破壊、滅亡、死等の説明を缺くに至ればなり。埃及に於て、ペルシヤに於て、皆この三方の不可思議に對して皆三神を崇めたり。破羅門教も亦同じ原因に由りて之を崇拜するに至れるものなりと云はざるべからず。

然れども、波羅門教の神の信仰は、歸する所二つに分かる。一は凡神教たるものこれなり。一は偶像教多神教たるものこれなり。一方の信仰に據れば、ブラマは創造の神にして、一切万事、その内に生ず。而して、ブラマはこれ無形の精靈、抽象の存在なり。万物即ち「ブラマ」に出て、「ブラマ」に還へる。「ジヴァ」「ヴィシヌ」を初め、人間も、動物も、植物も、皆これ「ブラマ」の現象、畢竟は幻影たるに過ぎず。即ち世界は悉皆これ「マヤ」夢幻なり。故に「ブラマ」の外に存在なしとす。然るに「ブラマ」は抽象物にして、空々漠々たるものなれば、其現象即ち世界を「ブラマ」の表現と見ざるべからず。之を神の表現と見て神とす。凡神教たるもの、亦怪しむに足らざるなり。而して、一方の信仰も亦之と同じ思想の経路に由るなり。即ち世界万物は「ブラマ」の表現なり。而して、その「ブラマ」は抽象物にして

個在物にあらずとす。然らば其の表現の多端なる、所詮一の物の表現にあらずして、多くの物の表現ならざるべからず。然るときは、神は極めて多からざるを得ず。而して、その神各々個在すとせば、その身軀あり、形容あり、性格あらざるべからず。こゝに於て、多神教となり、偶像教となるなり。

理論は暫く之を措かん、現に波羅門教の信仰は此の二方面に向ひて分かれたるなり。故に其の哲學を尋ね、思想に依るものは、抽象的唯神論の極端に走せて、凡神教となり。其の信仰を厚くし、感情に依るものは、多神教となり、偶像崇拜となり、無慮數万の神を崇め祭れり。近代に至り此の教に新生氣加はり、韋陀の古典の研究を勉め、眞の波羅門教の精神たる一神教の教理を普及せんことを欲するもの出でさりしにあらずと雖、印度人民は滔々として此の偶像教、多神教に陥りて又救ふべからざるに似たりとす。

(四) 印度哲學の三派

韋陀經典よりして多くの哲學出でたり。その哲學は或は二十派、或は九十餘派に分れたりと云ふ。その重なるものを三派とす。即ち(一)僧伽哲學、(二)毘陀哲學、(三)尼耶也哲學

これなり。僧法派哲學の主唱者はカピラ、毘陀派はパタラーヤナ、尼耶也派はゴタマなり。是等の哲學は韋陀經典の「スムルチ」の中なる麻奴マヌ法典、又は「サストラー」の中に記されたるものにして、「スルーチ」と異り、全く人作のものなり。是等の哲學は互に一致する所あり、反對する所ありと雖、共に波羅門の教理を述べたるものにして、而かも、實踐道徳に關したる事を説けるものなり。就中、僧法派哲學は佛教の基礎、若しくは準備とされるものなり。ウイペルの如きカピラと佛陀とは異名同人なりとの説を立てたり。此の説素より信すべからずと雖、以て僧法派哲學と佛教との類似を知るに足らん。是等の哲學は理論部と實際部との二方面を有せり。理論部に於ては、宇宙は如何なるものより出づるかとの疑問を解き、實際部にては、人は如何にして迷倒より救はるべきかを説けり。第一問に對して、毘陀派は一の「ブラマ」より出づ故に世界は夢幻なりと答へ、僧法派は無始無終の靈魂と、自然との二つより出づと答へ、尼耶也派は無始無終の原子と、靈魂と、神との三位より出づと答ふ。第二問に對しては、三派共に一致したり。即ち靈魂をして肉體物質、自然の羈絆を解脱せしむる所以の知識に依りて、迷倒を免かれ得べし。業は慾念を伴ふが故に妄想迷倒なり。唯この知識人を安靖平和に導くべしと云ふなり。又此の三派の哲學は、共に輪廻の説を執り、輪廻は慾の結果なる迷なり。心に或る事を思ふときは、その靈魂は忽ち輪廻して、永く苦しみを受くべく、心若し一切の妄念を斷ちて靜肅なるときは、安靖平和に歸すべしとせり。神の崇拜につきては、三派同じからず。毘陀派は因陀羅「アグニ」等の神を以て一の神の多現なりとし、僧法派は一切神を説かず、無神派と稱せらる。然れども、神の存在を非認したるにもあらず、唯之を忘れたるに似たり。されば、此の三派の哲學は皆な唯心論なり。自然世界を以て迷倒の泉源となすものなり。一心一切の忘念を斷ちて、靜寂沈靖、以て之を解脱し得べしと説くものなり。基督教の救済の信仰に依り、神の愛に依り、將又敬虔に依りて來ると説くに反して、無爲、無念、消極の法を以て救済を得べしと説くものなり。故に是等の哲學の倫理は消極的なり。基督教の積極的なるに反したりと云ふべし。

此の三派の哲學、就中僧法派哲學の神を説かず、創造を説かず、而して、解脱を説き、輪廻を説く、之を佛教の教理に比するに、幾んど一致せりと云ふべし。佛教か波羅門教に負ふ所多き所以のものは、即ちこの哲學に借る所多きに由るなり。然らば則ち、僧法派哲學を以て佛教發生の豫備と見るも、未だ必ずしも不稽ならざるべきなり。

(五)波羅門教の現勢

波羅門教は、佛教の發達に依りて一旦衰微に傾き、歩を佛教に譲りて調和を求めたりき。然るに、紀元八百年頃學サンカラカリヤ起りて之を恢復し、純粹の万有神教を説きたりき。之より大ひに勢力を得て、今日にては其信徒一億一千万を有すと稱せらる。大宗教たり。然れども、普通の波羅門教はサンカラカリヤの説きし所に似ず。三位説を執りて、而かも「ジヴァ」を特に崇拜する派と、「ヴィシユヌ」を特に崇拜する派とを生じ、偶像を造り、供物を献け、頗る迷信を懐くに至れり。此の兩派の經典は二部、「プラナス」、「タントラヌ」トと云ふ。普通の人民は之を第五の韋陀と稱して尊敬すと雖、畢竟韋陀の中より四五の教を執り、之を敷衍して種々の附會説をなしたるものに過ぎず。

然るに、近世に至りて「ラージャヤ、ラーム、モハン、ロイ」トと云へる波羅門あり、紀元千七百七十四年、波羅門の大改革を企て、一宗を建てたり。即ち一神を説き、多神を排し、又偶像をも斥けたるものにして、この一派を「ブラマ、サマージ」トと云ふ。ラーム、モハン、ロイの死後、其の友人之を續き、その子亦同じ運動をなして、之を盛ならしめたり。然るに、又ケシヤブ、チャンドラ、センと云ふもの起りて、韋陀經典に依らず、神は人の父にして人は神の

子四海皆兄弟なりとの説を立て、一新派を建てたり。之を新「サマーワ」派と云ふ。此の他にも尙新運動をなすものあり、其の信者の元氣亦盛ならざるにわらずと云ふ。

第九章 佛教

(一)東洋の新教

基督新教は羅馬カソリック教の外形外飾に流れ、壓制束縛に過ぎ、儀式典禮に偏し、道徳なく、自由なく、精神なきに至れりしとき、人生を説き、自由を説き、道徳を説き、精神を説きて、驟然として起りたりしものなり。佛教は波羅門教の階級制カストシステムに偏し、儀式典禮に過ぎ、道徳を後にし、慈悲を忘れて、單に寺法宗禮の盛大をのみ是謀りし時に至りて、之に反したる教理を以て起りしものなり。故に佛教は東洋の新教「プロテスタント」なり。西洋の學者は之を然らずとして、反て佛教は羅馬宗に似たり。佛陀の像に跪拜するが如き、妻帯を禁するが如き、僧尼、比丘、比丘尼の制あるが如き、念佛誦經をなすが如き、鐘樓を設くるが如き、「ダレー、ラマ」ト西藏佛教の教主を置きて、僧尼を管理せしむるが如き、羅馬基督教の法王を置き、教堂に鐘を鳴らし、誦經祈禱をなし、僧位尼位の制を定め、不

犯を法とし、聖像十字架を拜するに勞弊たり。故に佛教は寧東洋の羅馬宗なりと云ふ。若し此の論斷を當れりとせば、佛教は基督教よりも古きか故を以て、羅馬宗の是等の宗制は佛教のを移せしものなりと斷することを得べし。是等の宗制の果して何れより移れりしものなるや否やは暫く措き、余はクラークの斷定と同じく、佛教を以て東洋の新教なりとし、波羅門を以て羅馬宗に似たりと斷するの能く當れるを知るなり。今少しくその理由を説かん。抑も歐羅巴に於ける基督新教の運動は、その前印度に於て佛教の行ひし所のものを、再演したるか如き觀あるものなり。佛教が波羅門種族の制に反して、人生平等の見を持せしは、基督新教徒が羅馬僧侶モナクの制に反して、自由平等の見を持せしに同じ。波羅門教か神聖壯嚴の禮を以て解脱を得べしとせしは、羅馬宗かサクラメンタル、サルエーシヨン聖禮救世の制を定めたるに同じく、佛教が一人一個の信念に依りて、一人一個に解脱し得べしと説きしは、基督新教か自覺、自信、自山の精神を以て、神の救を得べしと説けるに同じ。波羅門教も、羅馬宗も、極端なる唯神主義を執り、肉體、物質を以て靈魂の敵なりとなせしに、佛教も、新教も、因果の理法を認め、慈愛的、人生的の教理を説けり。

既に大體に於て斯の如くに類似す。尙進てその他の點を比較すれば、即ち羅馬、カソックカソリック教も、波羅門教も、祭祝を以てその宗教の中心とせり、之を以て、信徒の靈魂に安慰平和を與へ、罪障を消滅、又は贖償せしめ得べしとせり。佛教と基督新教とは、之に反して人は教に依りてその心を平和にし、安樂にすることを得るものとせり。波羅門教も、羅馬宗も、その説法は信徒等を服従せしむるが爲にする所なりと雖、佛教とプロテスタントプロテスタントとの説教は、心の平和を得せしめ、教義を明にせしめんが爲なり。波羅門教に於ては階級制は破るべからず、波羅門族獨り神聖にして高位を占む。羅馬宗に於ても、亦その僧侶は獨り神聖高位にして教會を專斷せり。佛教と新教とは全く之に反して、如何なる人も出家し得べく、如何なる人も教會の管理者、牧師、教官たることを得べしとせり。故に寺院を建つるか如き、鐘樓を設くるか如き、祈禱誦經をなすか如き、不犯を法とするか如き、外形に於ては、佛教羅馬宗に似たる所少なからずと雖、其内部を窺へば、即ち反てプロテスタントプロテスタントと似たり。佛教は、即ち基督新教の羅馬宗に反して起りしが如く、波羅門教に對し、階級制に反して平等を説き、唯神主義に反して因果を説き、宗法の壓制的なるに反して自由を説き、聖禮に依れる解脱に反して、信仰に依る解脱を説け

りしものなりと斷ずることを得ん。唯西洋の新教と東洋の新教と、その根本に於て異なるもの一、曰く、神の觀念これなり。西洋の新教は羅馬宗の唯神主義を排したりきと雖、然れども、世界現象の万事を擧げて流轉と見るものにあらず、妄迷倒と見るものにあらず、自然現象は自然現象のみ、神の國をその内に現することを得んとすなり。佛敎は波羅門敎の唯神主義に反したるの餘り、世界は流轉なり、自然に迷倒なり、無常迅速なりと見る。遂に天地創造の事を説かず、神の觀念を失へり。波羅門敎に於ては絕對的精神、即ち唯一の「ブラマ」は實在にして、世界は夢幻なりと見たるを、佛敎に於ては、世界は永劫流轉の世相、空に同じと見て、他に一の實在をも許さざるなり。僧侶派哲學の神を説かずして、解脱のみを説ける、即ち佛敎と一致せりと云ふべし。斯の如く、佛敎の運動と新敎の運動と相似たるのみならず、尙他に二つの大に似たるものあり。羅馬宗も、波羅門敎も、單に宗教にして、道德的の分子に乏しかりしなり。佛敎と新敎とは、之に反してその説く所、道德的なり。又佛敎は新敎かその起りたりし地、即ち伊太利、スバニヤ、オーストリアに於て盛なりしが如く、其の出生地たる印度に於て盛なりしと雖、而かも、亦新敎か伊太利、スバニヤより追はれたりしが如く、その出生の

地を追はれて、西藏、安南、支那、日本等に移り、古地にありては、唯その遺蹟を見ることを得るのみとなれり。

(二) 釋迦牟尼

吾人は佛敎の普及せる國の人なれば、佛敎の大體は、皆之を知らずと云ふことなし。既に佛敎を知る、誰か釋迦牟尼を知らざるべき。然らば之を殊に茲に説かんは無用なるべし。

然れども、釋迦とは種族の名にして、單に佛敎の祖、悉達の事を云ふものにあらずとの説あり。又之を然らずとす説あり。釋迦牟尼の事に關しては、尙論すべきものありと云はざるべからず。然れども、此の書は斯かる殊題の研究を事とするものにあらずして、聊か世界の大きな宗教の比較を試みたるものなり。故に余は斯かる殊題を避けざるべからず。

釋迦牟尼は紀元前七百年、中央印度の北方に當れる地、迦毗羅と云へる都府に生る。刹帝利種族なりとは、西人の説く所なり。邦人の説く所も、亦迦毗羅城に生ると云へり。幼時既に大慈悲心あり、性亦最も穎悟、長して雪山に入りて沈思冥想、靜に人間の行事を

案し、爰に波羅門教を離れて一家の教を立て、乃ち出て、説法を初めたり。時に三十歳なりしき傳ふ。

本邦傳ふる所に據れば、初に説きたるは、即ち釋迦か大悟せる絶對完全の眞理を、そのまゝに説きたるものにして、華嚴經これなり。然れども、聴くもの未だ之を理解すること能はず。機縁未だ熟せざるを以て、阿含、方等、盤若等小乘淺近の法を説き、次第に上進して、遂に大乘を説き、高尙深遠なる一乘眞實の法を説けるなりと云ふ。

釋迦は如何なる人なりしや、佛僧等かその教權の下にありて、半ば盲信的に傳へたる所の説を別にして、猶イエスの傳をその教權に屈服せずして、評論するか如くに評論するは、宗教學上極めて必要にして有益の業なり。然れども、之を爲さんとすれば、即ち最も釋迦在世の時の事實に通せざるべからず。斯かる問題につきて事實に由らざる理論は少しの價値もあることなし。然れども、斯かる事實の研究は殊題にして、余の本書之目的にあらざれば、こゝには之を不問に附せざるを得ず。唯余は釋迦を見る猶イエスの如く、此の世界に於て、三人を見るべからざる大人なりと云ふを以て満足せざるべからず。

傳ふる所に據れば、釋迦の法を説きしや、他の宗教の開祖と同じく、唯口舌と行爲とを以て、或は之を耳に、或は之を眼に示せしに過ぎざりしなり。即ち聞かしむると感せしむるとのみにありしなり。されば、その經典は釋迦在世の時に於て出でたるにあらざり。釋迦滅後、加葉波等、小乘諸經を結集し、阿逸多等、大乘諸經を結集し、その他の佛弟子等、各又聖法を乗り、契籠を持て、群生を利し、殊に優婆塞多の如き、一切の諸經を瀉瓶して遺す所なく、後又馬鳴、龍樹、無著、世親等の論師現はれて、大乘の教理を唱へたりしを以て、即ち之を今日に傳ふことを得たりしなり。

(三) 佛教の經典

佛教の經典は基督教の經典の如く、新舊二つの約書を以て足れりとするが如き、單純なるものにあらず。前項に説きし如く、佛滅後に佛弟子等の結集又は論釋せし佛典、之を大別して三とす。素怛覽藏、毗那耶藏、阿毗達磨藏と云ふ。又之を總稱して三藏と云ふ。素怛覽藏は契經なり、毗那耶藏は律なり、阿毗達磨藏は法論なり。而して我國の天台に傳ふる所に據れば、釋迦の説法は之を五時とす。(一)華嚴、(二)阿含、(三)方等、(四)盤若、(五)法華。涅槃これなり。要するに、佛教は衆生の一の煩惱、即ち一の塵勞に従ひて、一の法門あり



とするもの、八万四千の煩惱に對して、八万四千の法門を設くとせり。さればその經文の多き、今一々枚擧すべからず。

然れども、一切佛敎經典は、一切釋迦の説きたる所なりや否や、是一の疑問に屬せり。モーゼの記せし所なりと傳ふる、舊約書中の創世記、律法書等にして、モーゼの筆に成らざるものありとは、基督教徒中にも許せし所の事實なり。此を以て漫に彼に比すべきにはあらずと雖、然れども、佛典中、波羅門敎の敎理の混したるが如きものあり、多神敎的思想の混じたるものあり、其の一人の説法に出でたりしにあらざることを疑ふに足るものあり。故に公然釋迦牟尼の説けりし所の經なりと傳へらるゝものゝ中、尙他人の説きしものなきにしもあらざるべきなり。是等の事を研究するは、又宗敎學上一の事業なるべし。

## (四)佛敎の中央思想

佛敎は「アリヤン」人種の中に起りたりきと雖、今やその人種とは絶縁して、「モンゴール」人種の宗教となり了はれるか如し。支那、西藏、安南、緬甸、暹羅、日本等、東洋は幾んどその信者を以て充さるゝに至れり。此の點に於ては、基督教と同じく、國家的にあらすして、

世界的の性質を有せるものなり。

一の基督新敎なりと雖、英國敎なる「エビスコパール」宗と、「ユニテリアン」宗とは、多少異なる所あるか如く、佛敎も亦我國に於けるものと、支那、安南に於けるものとは、異なる所あらざるを得ず。殊に南方佛敎、西藏、安南、暹羅等に行はるゝものゝと、北方佛敎、支那、日本に行はるゝものゝとは、自から其の所説を異にせり。然れども、如何なる地に行はるゝ佛敎にも、普通にして、而かも、その根本たる思想は、又之を捕捉する事を得ざるにあらす。余は余の語法を以て之を説かんに、蓋し佛敎の敎理は二條の大原理を根底とするものなりとす。二條の原理とは、即ち一に曰く、現世界を妄迷と見るもの、二に曰く、純然無垢界の可能を信するものこれなり。更に之を佛敎の用語にて云へば、(一)「法界、生滅界、迷界、(二)「眞如界、不生滅界、悟界、これなり。現在の世界は生死、増減、變轉、一刻も止まらざる無常變化の世界にして、罪惡の府たるを免れず、迷惑の地たるを免れざるなり。此の生死、變化の迷界を離脱して、不生不滅の悟界、眞如界に轉入するもの、即ち佛敎の目的なり。約して之を云へば、轉迷開悟のみ。此の轉迷開悟の敎理たる、波羅門敎にも、亦存する所のものなり。波羅門敎は云ふ、此の世界は、幻影なり、迷界なり。故に之を離脱して眞

實體なる「ブラマ」に歸へれど、佛教は唯この眞實體なる「ブラマ」即ち一神の觀念を缺けるのみ、迷界、生滅界の離脱を目的とするに至りては、二教一致せりと云はざるべからず。

此の眞如界、不生滅界、悟界に轉入するには、如何すべきか。こゝに四條の原理あり、是も亦總ての佛教に通したるものなり。曰く、(一)一切の存在は迷なり、蓋し生滅變化を免れされはなり。曰く、(二)此の迷の原因は、生滅變化する所の事物に對する慾念にあり。曰く、(三)此の迷を伴ふ慾念は、一切之を切斷する所の涅槃に入るに因て、之を離脱することを得べし。曰く、(四)此の目的、即ち涅槃に入らんか爲に、適當の方法、即ち修行勤行を設く。乃ち正信、正覺、生滅に迷はず、變化に感はず、永劫不變、純粹無垢の境界に入らんことを修行するにありなり。

釋迦の本願は、衆生を煩惱より救はんとするにあり、彼等の永遠不朽の平和安靖を興ふるにありなり。此の點に於ては、イエスの万人を救ひ、天國を地上に布かんと欲せし所と同一なり。此の二人は、全く人生的の教理を説きしものなり、大慈悲心なり、大愛心なり。モーゼ、モハメットが一方に向ひて慈悲ありて、他方に向ひて殘酷なりしか如き比

にあらざるなり。又佛教の説く所は、基督教の説く所と同じく、此の世界變化の理法、即ち因果の理を忘れず、その變化の事實より推理して、以て之を人心に訴へ、その開悟を求むるものなり。釋迦の初て法を説きしより以來、皆これ理を推して人心に訴ふるにありて、決して劍を以て、その教に服せしめしにあらざるなり。故に之を人生的宗教、道理的宗教と云ふも、不可なきなり。

然れども、佛教の眞如界、不生滅界、悟界、即ち涅槃の一境は、抑も如何なるものなるや、唯一の心意の狀態に止まるや、將又斯の如き實在ありとなすものなりや、基督教は斯かる究局の點に至りては神を説く、吾人か一切の迷に離れて、眞理を覺悟したる時、即ち永劫不變、純粹無垢の平和安靖を得たるときは、是神の和に入れるものなりとす。佛教は然らず、妄想識滅、不生不滅となすのみ、佛教の無神論なるは、即ち之に依りて明なると同時に、不可思議論に陥れるも亦明なりとす。その眞如を以て、不可説、不可念なるか故に爾か名くとなすか如き、不可思議論の傾向なりと云はざるべからず。

佛教の教理は基督教の教理よりも、その數多し。今こゝに之を盡し得べきにあらざれば、餘は之を略すべし。然れども、以上説きし所のものは、佛教の中央思想として、誤りな

十 甲

きものなりとは、余の信して疑はざる所なりとす。

(五)その現勢

佛教の信徒は頗ぶる多數なり。之を基督教の信者に比して、決して軒輊する所なく、猶太波羅門の如き宗教徒に比すれば、遙にその數多しとす。今一二の學者の統計に據りて、基督教徒と對比すれば左の如し。

カンニングハムの統計

基督教徒

二億七千万人

佛教徒

二億二千二百万人

ハッセルの統計

基督教徒

一億二千万人

佛教徒

三億千五百万人

ジョンストンの統計

基督教徒

三億〇一百万人

佛教徒

二億四千五百万人

ベルキンの統計

基督教徒

三億六千九百万人

佛教徒

三億千万人

斯の如く廣大なる教徒を有するのみならず、近時我國の佛教の如き、その教徒の一部に新生氣を生じ、その刷新を謀らんとするか如きものあり。印度に於ても、亦同様の氣運ありと云へば、蓋し又更に大に振ふ時あるべし。

(六)其の宗派

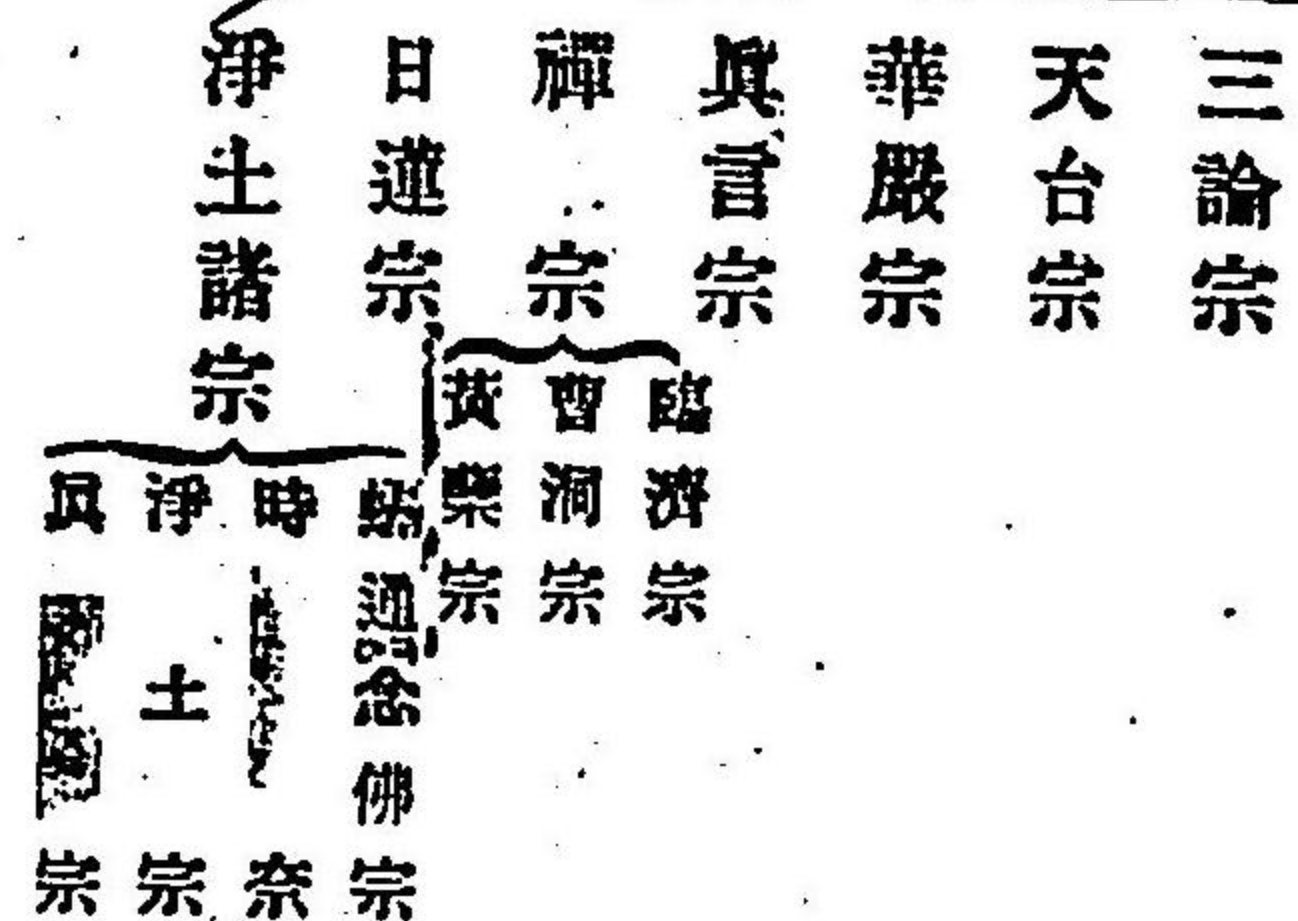
南方佛教と北方佛教とは、その所説を異にする所あり。従てその宗派同しがらす。蓋し南方佛教は概して小乗にして、北方佛教は大乗多し。一は涅槃を虚無なりとし、一は之を眞實體なりとす。今是等の宗派を悉く枚擧するの遑なければ、我國に存する佛教の各宗派を掲げて、本章を終らん。

俱舍宗

成實宗

法相宗

佛教



第十章 結論

(一)「アリヤン」の宗教「セミチック」の宗教

世界に有力著名なる宗教を列擧し來れば、世界の人類は、是悉く宗教の信者若しくは信者たるべき約束を有したるもの、如く、如何なる地にも宗教あり、信徒存せざるはなきなり、是唯余の空想に描く所にあらずして、世界の事實なり、前章以上説く所のも

の皆之を證せり、波羅門教、ヅラスタール教、佛教は、アリヤン人種の中に起れり、猶太教、マハメット教、基督教は「セミチック」人種の中は起れり、「チュラニヤン」人種又は「チュランヤン」の宗教思想あり、故に世界の人類は皆是宗教信者なり、宗教信者たるべき約束を有したるものなりと斷するも、亦不當ならざるべきなり、世界の宗教の中にて、最も有力著名なるものは、佛教と基督教となり、此の二教は各その前驅者を有せり、佛教にありては波羅門教、基督教にありては猶太教これなり、而して、此の二教は一は「アリヤン」の宗教にして、他は「セミチック」の宗教なり、而かも、奇なるは二教共にその起りたる根源の人種の中に榮へずして、却て他の人種の中に繁昌す、「アリヤン」の中に起れりし佛教は、その人種を見棄て、「チュラニヤン」の宗教となれり、「セミチック」の中に起れりし基督教は、「セミチック」の間よりも、「アリヤン」の間に大勢力を有せり、此の二教が人種的ならずして、一般弘通の性質を有したるものなるは、之を以て知るべきなり、此の「アリヤン」「セミチック」兩人種の宗教を除きては、世界に大いなる宗教と云ふべきものなきなり、埃及、希臘、羅馬、スカンヂナビヤの古教は今日既に亡びたるものなり、南北亞米利加の諸國の中には、別種の宗教なきにあらずと雖、世界に著

名ならず、我神道、儒教、道教の如き、世界に聞へたる一種の教理なりと雖、宗教として見  
ることを得べきものにあらず、故に「アリヤン」セミチック「兩人種の宗教を除きては、世  
界に大いなる宗教なし」と云て可なり、此の二宗教の系統に就て、マクス、ミュラーは一  
表を製したり、即ち左の如し、

「スミチック」人種 — 猶太教(舊約書)

基督教(新約書)

「マハメット」教(コーラン)

「アリヤン」人種

「アリヤン」人種 — 波羅門教(韋陀)

佛教(三藏)

「ズラスター」教(アベスター)

「チュラニヤン」人種

世界は終に此の二大系脈外の宗教を、盛大ならしめざるもの似たり。

(二) 神道と祖先教

或は我神道を以て、宗教たるの價值充分なりとし、而して、世界有力のものたることを  
得べしとなすものもあらん、然れども、神道の説く所にして、若し天御中主尊を以て天  
地開闢の神とし、天照大神を以て太陽とし、伊邪那岐、伊邪那美の二神を以て、我日本を  
創造したるものなりとし、是等の神を以て我祖先となして崇拜するものならば、是宗

教としては、高等の位置を占めかたき祖先教なり、唯我國民の間にのみ辛うして行は  
るべき國民的宗教なり、夫れすら人智の進歩に遭ふて、斯の如き開闢説の信すべから  
ざるを知るに至れるものに對しては、毫も教權を有するを得ざるものなり、又神道  
は唯祖先を敬慕し、愛敬して、之を祭祀する禮を取るのみにして、之を天地の神と見る  
にあらず、之を靈力あるものと見るにあらず、又宇宙の最大根本と見るにあらず、唯我  
祖先なり、其の性質、道徳、做ふべく、慕ふべく、又敬ふべきものありとなすのみならんか、  
是宗教にあらず、尊古の念のみ、敬慕の情のみ、唯祖先を祖先として尊敬祭祀するもの  
のみ、宇宙の原因と人の運命とに關したる超自然力の信仰にあらずるなり、余は神道  
を以て斯の如きものなりと見る、而かも、我國民が尊祖の情に富めるは、世界に誇るに  
足ると雖、是我國民間の事のみ、古代を野蠻と見、近代を文明と見、文明は野蠻に勝れり  
と見るときは、斯の如くして徒に祖先を敬慕尊敬し、復古回舊せんことを欲するは、即  
ち野蠻を歓迎するものならざるべからず、余は祖先を敬すべしとなす、然れども、之に  
做ふべしと云ふこと能はず、又祖先を祭るも可なりとなす、然れども、祖先を今に活現  
せしむべしと云ふこと能はざるなり、要するに、祖先の或る良質は之を傳受して、今に

發現せしむべきも、新原素の更に之に勝るものあらば、之を採る固より毫も踟躇すべきにあらざるなり。

(三) 儒教

天生蒸民有物有則民之秉彝好此懿德とは詩經の一句なり。物あれば則あり故に道存するなり。大極存するなり。大極あり、兩儀を生ず。兩儀四象を生ず。斯の如きものは孔子の天地創造説なり。故に儒教は實在論的思想を有したるものにして、一種の哲學と見るべきものなり。西洋の比較宗教學者は、動もすれば儒教を哲學と見ることがある。然れども、儒教は天を云ふと雖、その倫理は人の常識に因りたるものなり。理氣を説くと雖、超自然力の信仰に俟つ所あるにあらざるなり。唯人は斯の如く行ふべきものなり。斯の如く爲すべきものなりと教ふるのみ。若し之を以て宗教なりとせば、小學校にて教ふる修身科は、即ち宗教たらざるべからず。蓋し人の行ふべき事、爲すべき事を教ふるものなればなり。カントの『實踐理性の批評』に於て、人に人は斯く行ふべし、斯く行はざるべからずとなす。絶對自由の意志存在と説くは、孔孟二子の性善を説くと、其の所

説を異にするも、其の意は相同じ。何となれば、此の二説共に道德の無上大法の、人に存するあるを主張するものなればなり。其の名は自由意志と云ひ、性善と云ひ、頗る相異れりと雖、その實は善惡選擇の大善心を固有すと説くものなり。若し孔子の説を以て宗教なりとせば、カントの説も、亦宗教なりと云はざるを得ざるべし。

(四) 道教

道教も、亦西洋宗教學者の宗教と認むる所なり。雖、儒教と同じく、決して之を宗教と見るべきものにあらす。後世誤りて、或は之を道術家の執る所の道なり、或は刑名家の依る所の道なりとして、或は幻術を説くものなりとし、或は權略術數を述ぶるものなりとするものありと雖、亦是道教の真相にあらす。抑も道教は一種幽玄なる哲學にして、孔子の哲學に反し、虛無を以て万物の根源となせしものなり。『無名、天地之始』なりとは、道教の主唱者老子の第一章に云ふ所。『有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、(第二十五章)』とはその天地の原因に就て云ふ所なり。故に孔子の道の實在なるに反して、老子の道は虛無なり。虛無に始まりて實在となり、實在亦虛無に歸す。二者は二にして一、即ち絶對なり。太虛なり。故に老子

は無名を天地の始とし而して、「有名、天地之母」なりとせり。無名と有名と、即ち虚無と實在とを、同一と見るにあらざれば、決して斯く云ふことを得ざるなり。老子より後るゝこと數百年、ヘーゲルは否定は肯定なり、實在と虚無との二の總念は、全く反對したるにあらざりして、絶對的に同一なり。唯各一方の中に他方のものゝ消散しつゝあるのみとなせり。蓋し有と云ふ思想は、無と云ふ思想を含むにあらざれば成立せず、無も亦有なければ成立せざればなり。老子の見は、即ちヘーゲルに先さんじたと云ふべし。

道教は儒教と同じく倫理を説けり。道徳を語り、孔子の忠恕に反して無爲を説けりと雖、然れども、儒教と同じく天地の原因の説明と、人の道徳の講究とに止まれり。孔子が「未能事人焉能事鬼……未知生焉知死」と斷言して宗教的信仰を排し、あく迄も人事的、社會的に道徳を説けるとは、少しく異なるものあり、頗る厭世的の傾向あるものなりと雖、而かも、唯聖人真人たる所以の道を説けるのみ。

(五) 世界的宗教

以上の理由を以て、余は神道、儒教、道教を宗教として尙篇中に擧げざりしなり。加之な

らず、是等の教理は之を信仰するものあるも、地方的又は國民的のものにして、世界的の性質を缺けり。神道は我國民の間に於てこそ、或る部分に信仰者を有するなれ、之を世界、否隣國たる支那、朝鮮に持ち行くすらも、尙その信者を得べしとは想はれざるなり。蓋し彼等は彼等の祖先あるを以て、我等の祖先を信するを要せざればなり。儒教、道教は支那と我國との或る部分に於て教權なきにあらざり。然れども、是道徳の原理として把持するものにして、超自然力の信仰としてはあらず。實利主義を執りて政治上に立ち、唯心主義を以て哲學上に立つが如く、儒教又は道教を主義として道徳上に立つのであるのみ。斯の如き教理は、或る人の道徳の根底とは成るべし。世界の宗教とは成るべからざるなり。

埃及希臘、羅馬、スカンデナヴィヤの古教は、今は既に亡びたるものなれば、之を論ずるに足らずと雖、斯の如き宗教は、一國民の宗教にして、一步國外に出つれば、他國の宗教たることを得ざるものなり。埃及の「タイホン」熱の神は惡魔なり。之をスカンデナヴィヤ人に種に信せしめんとせば如何。彼等は熱の神を善神となすなり。タイホンをスカンデナヴィヤに移住せしめなば、恐らくは忽ちに善神として歓迎せられん。斯く歓迎せらるゝの

結果は「タイホン」の元の性質を失ふと共にその宗教を失はん。「オルムツツ」「プラマ」「オリシイス」は「ベルシヤ」に於て、波羅門に於て、又埃及に於て、幾んど同じ性質の神なりと雖、「オルムツツ」の占領する國家へ「オリシイス」を送らは如何。「ベルシヤ」人は前者を信すべく、埃及人は後者ならでは崇めざるべし。左しも本國に於ては、威權赫々たる是等の神も、外國に行きては土芥にも同じかるべし。宗教亦同じからざるを得ざるなり。是抑も何故に由るや、其宗教の着眼、國土國民に限らるればなり。

波羅門教、猶太教、「マハメット」教の如きは、以上の宗教に比すれば、その著目頗ぶる大ひなり。少なくとも數國の人民を統一すべき教理を有せり。皆に之を有するのみならず、現に數國人民を統一したる事あるものなり。然れども、階級制カストシステムは果して世界の人を悉く統一するに足るものなるや、悪人は之を救はずとするか如き、果して世界の人の歸依を得べきものなるや、劔と血とを以てする傳道は、果して如何なる人をも服し得べきものなるや、天下万人を平等なりと見、力を以て教を強ひずして、道理を推して傳するにあらざる宗教は、或る人種の間には歸依を得べきも、天下万人の間には、決して之を得べきにあらざる。皆に理論に於て然るのみならず、事實は正に之を證明せり。波羅

門教の佛教に比して大ひに勢力なき、猶太、「マハメット」二教の基督教に歩を譲りて、幾日の勢力なきは、皆之が爲ならずや。

天下万人を平等と見、四海を兄弟同胞なりと見、敵をも愛すべしとなし、一切衆生を濟度せんことを願ふ、是等は世界に普及せらるべき性質ある教理なり。斯の如き性質の教理を有する宗教は、即ち世界的宗教なり。佛教、基督教を措て、他に斯の如き教理を有する宗教なし。即ち此の二教は理論に於て、世界的宗教たるのみならず、事實に於て世界的宗教なり。基督教は西洋に、佛教は東洋に、各世界的の勢力を以て、弘布しつゝあるのみならず、彼は既に東洋に來り、此は將に西洋に入らんとす。東西の兩大宗教、兩大思想は、今や世界の廣原の上に、その優劣を競ひつゝあるなり。余は之を偉觀とす。

然れども、宗教の輸入輸出、同化排斥は、その間頗ぶる意味なくはあるべからざるなり。基督教は羅馬に入りて、如何なる性質となりたりしや。スカンチナビヤ人種の性質は、基督教に如何なる新生氣を起さしめたりしや。羅馬「カソック」宗の外飾的、形式的、法治的、中央集權的なるは、羅馬人種の特性と古教とに化せられたればなり。第三章十四を看よ。基督新教の自由的、精神的、獨立的なるは、スカンチナビヤ人種の特性と古教と



の勢力を加味したればなり。第三章十八を看よ、佛教は支那に入りては、その人民の怯弱の友たり、日本に入りては、大和民族武勇の友たりしにわらずや、世界的宗教はその道理に於て世界的なり、國民をして少なくとも、その狹隘偏僻の思想感情を去らしむるものなりと雖、而かも、亦一方に於ては、その國民の特性、古教慣習に同化して、更に一層の變化をなすものなり。一層の變化をなして、以て一方にはその宗教の發達たり、他方にはその國民の發達たるものなり。宗教は遇俗の事のみにあらず、國民の害物にあらず、少なくとも國民が超自然力に對する一の智見、一の信仰にして、又その元氣の宿する所なるは、比較宗教學の明に教ふる所なり。

世界之十大宗教畢

明治三十年十一月三日 印刷  
明治三十年十一月六日 發行

定價金二十錢

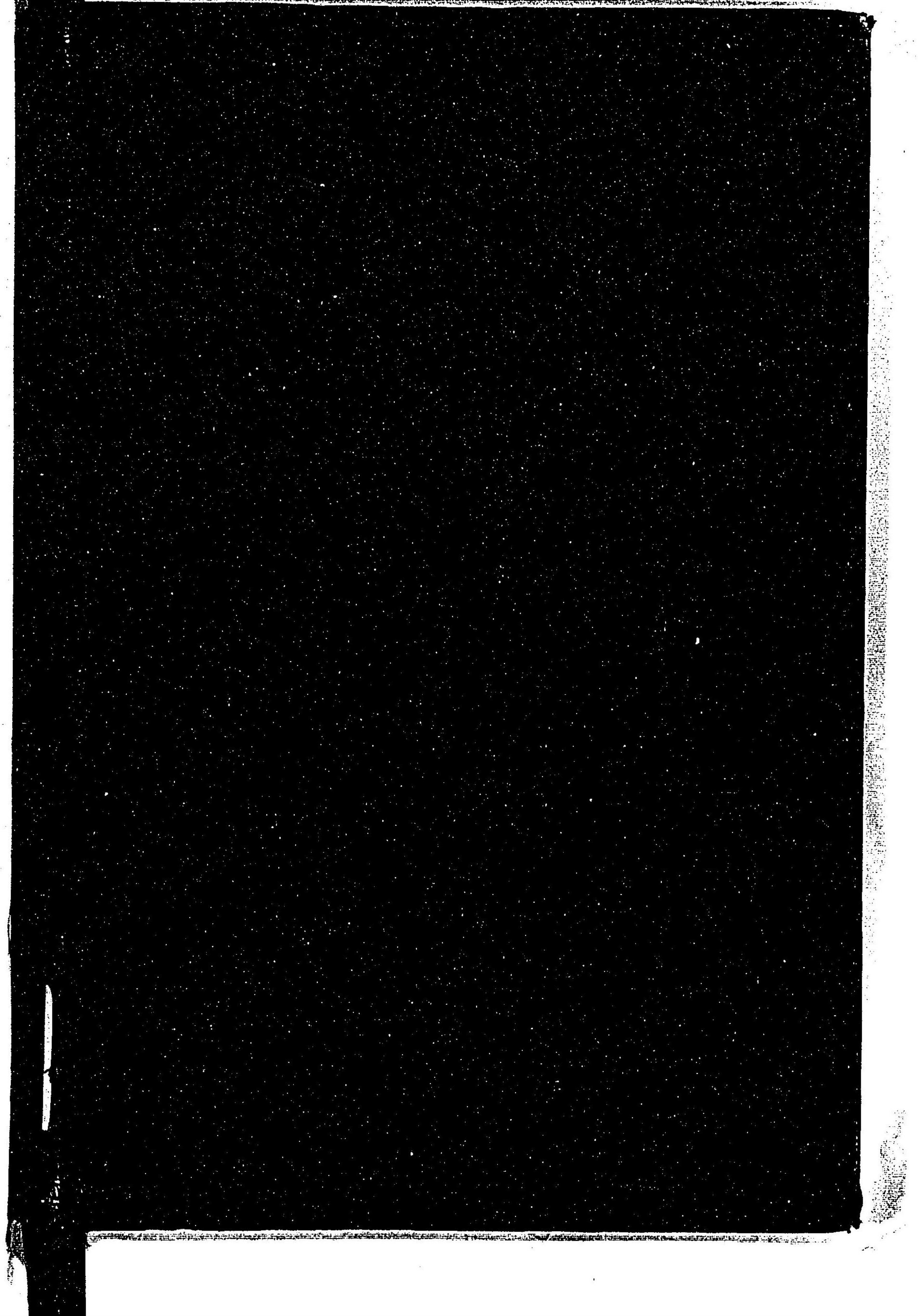


著者  
發行者  
代表者  
印刷者  
印刷所  
發兌元

東京市本郷區西片町十番地 久津見息忠  
東京市日本橋區吳服町壹番地 合資會社普及舍  
合資會社普及舍社長 須永和三郎  
東京市神田區柳原河岸十七號地 吉田章五郎  
東京市神田區柳原河岸十七號地 日新舍  
合資會社普及舍  
電話本局第五百〇六番



76  
99



76  
99

013700-000-6

76-99

世界之十大宗教

久津見 息忠/著

M30

ABA-0171



